出光美術館研究紀要第二十二号抜刷
二〇一七年一月三十一日発行

中国北朝時代の陶瓷器の様相

徳留大輔

中国北朝時代の陶瓷器の様相

徳留大輔

はじめに
一、研究史とその成果・問題点の整理
二、出光美術館所蔵の北朝時代の作品
三、北朝時代の陶瓷器の流通の様相
まとめ

はじめに

一九九〇年代以降、中国考古・陶瓷研究の分野では、数々の発掘調査と新しい発見に伴い、研究が進展し新知見が急増している。北朝時代から隋唐時代に関しても、陶瓷史の再検討を促すような発見例がある。例えば白瓷の出現に関する問題や北朝時代における陶瓷生産のあり方などについては、大きな問題となっている。出光美術館の所蔵品の中にも当該時代に比定される作品があることから、本稿ではそれらの作品の年代と様式的位置づけの評価を改めて行うとともに、北朝時代における陶瓷器生産と流通の様相を整理することを目的とする。

一、研究史とその成果・問題点の整理

漢帝国が滅び、次に中国全土が統一される隋唐時代までの期間、中国は政治的に分裂した時代であり、魏晋南北朝時代と称されることが一般的である。当該期の陶瓷器に関する研究は、一九三〇年代頃から始まるが、華北・北方地域［註1］を対象としたものは少なく、南方（江南）地域の越州窯青瓷に関する研究が中心である。

当該期の華北地域を中心とする北方地域の陶瓷器の動態に着目した研究としては、①中国陶瓷史の中における北朝時代の陶瓷器の様相・様式をどのように評価するのか、②鉛釉陶器の系譜の問題、③南方産の青瓷と華北産の青瓷の問題、④白瓷の出現の問題、⑤黒瓷の出現期の問題などが中心に議論されてきた。そして最近では、⑥華北地域における様式・地域性に関しても議論が進みつつある。これらの研究はいずれも独立した問題ではなく、相互に関連していることは言うまでもない。また①の評価のあり方、つまり中国陶瓷史において、北朝時代の陶瓷器の様相に関しては、つまるところ②～⑥の内容を統合した問題であるので、

最後に整理する。ただし⑤に関しては資料数が少ないため、本論では詳細は扱わない。なお⑥に関して第三節で検討する。

鉛釉陶器の系譜の問題（②）

鉛釉陶器の歴史は古く、戦国時代（紀元前四〇三年～紀元前二二一年）には出現し、漢時代（紀元前二〇六年～二二〇年）には副葬明器などで鉛釉の製品が大流行している。しかし、中国における出土状況を見る限りにおいては、西晋・魏時代以降出土する量が減少しており、衰退している現象が見られる。とはいえ、漢時代以降、けっして鉛釉陶器の文化が全く無くなっていたわけでもない。たとえば、西晋滅亡後（三一六年）すぐの頃の事例として、遼寧省北票県西官営子の北燕（四〇七～四三六）の貴族馮素弗および家族墓［註2］において、低火度の鉛釉陶器と灰陶の壺類などが副葬品として出土している。これは、漢時代の緑釉陶器からの流れを汲むものとして理解されてきた［註3］。またこのような状況を西晋、十六国時代、北魏時代前期における華北の施釉陶器の脆弱性としながらも、その系譜は残存していた可能性が指摘されており［註4］、いわゆる容器や明器ではなく、宮殿建築の中に取り込まれ、鉛釉の技術は存続していた可能性も想定されている［註5］。また近年の新出土資料をもとに、河北、河南、山東、山西、陝西などの中原地域のみならず遼寧、北京、甘粛、青海、雲南や新疆のトルキスタン地域でも当該時代の鉛釉陶器が出土していることから、魏晋時代にも鉛釉陶器が完全に途絶えていないことも指摘されている［註6］。この鉛釉陶器が魏晋時代にあまり見られなくなっている現象については、曹魏政権における薄葬の習慣に起因している可能性が高いことは、やはり先行研究においてすでに指摘されている。

北魏時代（三八六～五三四）には陶俑の研究が着目されるが、容器類に着目したものとして謝明良氏［註7］が次のような整理を行っている。謝氏は山西の大同地区の北魏墓から数多く出土する鉛釉の壺類（広口・撤口ラッパ式細頸壺と盤口・撤口粗頸壺）に着目する。それらの製品は底部裏に三ヵ所支釘（目跡）が残っており、正置で焼造されている。作行きとしては無文のものが多く、ラッパ式細頸壺と粗短頸壺の施釉陶器の組合せが基本的な副葬容器の組合せになっており、これらの鉛釉陶器の形態が拓跋氏の伝統的な器形である可能性を指摘している。さらに大同南郊北魏墓群と大同沙嶺北魏太延元年（四三五）破多羅夫人墓（M7）の褐釉壺の比較から、鉛釉陶の容器が確認できる古い事例としてその存在を指摘している［註8］。ただし全体的な傾向としては、北魏時代中期、孝文帝が皇位についた頃以降、新しい陶瓷が墳墓から出土するようになっており、墳墓を荘厳する厚葬が再び復活したことが、華北における陶瓷活動に大きな刺激となり、鉛釉陶器の再興がなった可能性がある［註9］。

その後、東魏（五三四～五五〇）・北斉（五五〇～五七七）段階に入ると鉛釉陶器の製作技術はさらに進展し、非常に端正な造形性の製品も作られるようになっており［註10］、いくつかの鉛釉陶器の中には発掘報告書の中で青瓷として扱われているものもあるなど、非常に作りが良くなっていることが容易に推測できる。なお西魏（五三五～五五六）、北周（五五六～五八一）の墓葬からは鉛釉陶器の出土事例はきわめて少なく、その一方で東魏・北斉の領域である河南、河北、山西、山東からは鉛釉陶器が数多く出土している。

南方産の青瓷と華北産の青瓷の問題（③）

当該時期の青瓷の生産は圧倒的に江南地域が中心であることは、近年においても浙江地域で次々と当該地域の窯址が発見されていることからも疑う余地のないことである。華北地域においても西晋時代には越州窯系青瓷が墳墓から出土している事例が知られている［註11］。北朝時代には北魏の前期墓からは数は少ないが、山西大同司馬金龍墓［註12］（太和八年（四八四））から青瓷唾壺、山東臨淄崔猷墓M15［註13］（太和十七年（四九三））からは青瓷獅子形水盂、青瓷杯が出土している。この段階に見られる青瓷は南方産の青瓷の雰囲気をそなえている。後述するが、その後、洛陽遷都後の北魏時代後期になると、河北、河南などの地でも青瓷が確認されているが、河北地域に多い傾向がある。

青瓷に関しては、北魏時代の洛陽遷都後、漢化政策が進む中で南朝の様式の影響を受け、また高温焼成による青瓷が副葬品として選択される中で、華北地域での青瓷生産が始まったと想定される。そのため華北産の青瓷はその出現において江南地域からの影響が想定されてきた。華北産の青瓷として考えられている典型的な事例としては、北斉時代の河北省景県封氏墓群［註14］から出土した一群などが知られ、その他、神亀三年（五二〇）辛祥墓［註15］出土の青瓷天鶏壺（鶏頭壺）、延昌四年（五一五）宣武帝景陵［註16］出土の青瓷天鶏壺（龍柄壺）が北方青瓷である可能性がある［註17］。または東魏・北斉段階では窯址の発見例もあることから、それ以前に青瓷の生産が始まっていた可能性は高い。このことに関して、小林仁氏は特に胎土が黄白色で、釉が薄く、やや酸化気味で黄緑色あるいは灰緑色を呈する作例の青瓷が、南方産の青瓷と比べると完成度が低いことをあげ、その事例として北魏平城時期に属する、大同雁北師院北魏墓（M1）［註18］出土の青瓷碗や河南偃師連体塼廠北魏墓（90YNLTM2）［註19］出土の青瓷蓮弁碗などをあげている。また東魏・北斉時代の青瓷は淡い黄味をおびるものが多く、それらは同時期の低火度鉛釉の黄色釉製品との色の雰囲気や造形性においても共通する要素が多いことが指摘されており［註20］、南方産の青瓷を当初は模倣しつつも、華北的な青瓷作りが始まっていったものと思われる。

白瓷の出現の問題（④）

白瓷の出現の問題は鉛釉陶器との関係が注目されている。なお中国における白瓷の範囲は、「高火度の白瓷のみならず、低火度鉛釉の白い陶器が含まれることも多い」（長谷部二〇〇八［註21］）ため、問題を複雑にしている感がある。高火度の白瓷の出現に関する研究において、近年、特に問題となっているのは河南省鞏義白河窯の白瓷の生産年代と洛陽市大市遺跡出土品の評価に集約される。

鞏義白河窯における調査報告［註22］は次のように結論づけている。鞏義白河窯では、青瓷、白瓷、黒釉瓷などが焼造されており、それらはいずれも北魏時代に属するものである。白瓷は鉄の含有量が低い瓷胎で、透明釉で高火度焼成であり、また同時に青瓷も焼造していることから、白い器作りが意識して行われていた。また白河窯出土の白釉瓷と青釉瓷と洛陽漢魏城内出土の北魏白釉の造形と製作技術が共通していることから、鞏義白河窯は北魏皇帝が使用する白釉瓷と青釉瓷の生産窯であり、古代の文献である「洛京窯」である可能性があるとも考えている。また白瓷の焼成は青瓷の基礎上に発展しており、胎中の鉄を水簸し除去することにより、白瓷が生み出されたという出現過程を示している。

この鞏義白河窯の調査により、それまで白瓷の年代は隋代［註23］、あるいは安陽・武平六年（五七五）の范粋墓［註24］出土の白釉瓷一〇点の事例をもとに北斉時代と認識されていたのが、中国の研究者を中心にその出現期は、北魏時代までさかのぼる可能性が高いという見解が多くなっている［註25］。

一方で、この結論に懐疑的な見解もある。北斉范粋墓の白瓷が高火度釉でなく低火度鉛釉陶器であることや、また鞏義白河窯が年代を決定するにあたって比較資料とした洛陽大市遺跡［註26］の北魏時代とされる資料の年代設定に関する視点からの指摘である［註27］。特に大市遺跡の北魏とされる陶瓷器群は、その型式的な特徴から北魏時代と隋時代に分けることができ、白河遺跡の北魏時代と想定する陶瓷器群は隋時代に相当するものであるという指摘である［註28］。そして現状までに確認される白瓷は、安陽張盛墓［註29］（隋・開皇十五年〈五九五〉）の白瓷俑や、環脚盤や小型明器は白化粧土を用いない白色の胎土の上にやや灰色がかった透明釉の製品であるとする。そして白瓷の生まれる過程に関しては、たとえば北斉時代前期の茹茹公主墓（武定八年〈五五〇〉）［註30］から仰覆蓮弁六系蓋罐の蓋の釉色に見られるように青瓷の白色化が進み、その中から純白の白瓷が創出されるというとらえ方である。

この問題を考える上で、近年興味深い研究が進められている。それは邢窯と鄴北城の東城壁の外側に位置する曹村窯で採集した青黄色を呈する施釉陶の胎と釉の成分元素の組成分析である［註31］。その結果は、両窯の製品の胎は非常に類似していた。また釉薬は曹村窯のものにはいずれも鉛が含有されていたが、邢窯の製品には鉛を含有しないものと含むものが存在しており、鉛を溶媒剤とした鉛釉による器が邢窯の中には存在しており、青黄色を呈する白釉陶器に近いような器と鉛を取り除くことに成功した白瓷が存在していることを意味している。想像をたくましくすれば、北朝時代後期頃に、白釉陶器と白瓷が共存しつつ、徐々に白瓷が安定的に焼造できるようになった可能性が想定される。

このことは、北斉時代末期の范粋墓（武平六年〈五七五〉）の半球形白瓷碗は鉛釉による低火度焼成の白釉陶であり、高温焼成の白瓷ではないとの指摘［註32］や北周時代末の陝西咸陽・独孤蔵墓［註33］（宣政元年〈五七八〉）では青瓷碗、白瓷唾壺（盤口壺）が出土しているが、釉は黄色がかっており、安陽・張盛墓の白瓷など隋代の代表的白瓷とは様相が異なる［註34］といった状況、また同様の器形の青瓷唾壺（盤口壺）が安陽県張庄北斉墓から出土しているが、やはり黄色がかった白色に近い釉色である［註35］ことと矛盾しない。やはり北斉時代後期が白瓷への移行期であるのであろう。また曹村窯を調査した地元の研究者たちは范粋墓や講武城墓出土の青黄釉の陶瓷器は曹村窯で採集された製品と非常に共通しており、それらが曹村窯産の可能性があると同時に、それらは瓷器ではなく陶器であるとしている［註36］。現状ではやはり「安陽張盛墓（隋・開皇十五年〈五九五〉葬）の白瓷俑や、環脚盤や小型明器は白化粧土を用いない白色の胎土の上にやや灰色がかった透明釉の頃に白瓷が創出された」（森二〇一一［註37］）可能性が高いであろうと考えておきたい。いずれにせよ今後、周辺の遺跡・窯址の調査事例によりこれらの見解を相互に検証していくことが必要であろう。

ところで、これら②から④の製品を焼造した窯址は、後述するようにその発見件数はほとんど増加していない。北朝時代、灰陶類を除いて鉛釉の製品が数多く出土するが、それらは主に大同、太原、洛陽、鄴城な

どの地域で見られる。また北朝時代にはすでに青瓷が焼造されているが、邢窯［註38］、磁県貫壁窯［註39］、安陽相州窯［註40］、臨漳曹村窯［註41］等での焼造の可能性がある［註42］。また地域はやや外れるが山東省の淄博寨里窯址［註43］が知られる。これらの窯址に関しては、現在までに公開されている情報が少ないために詳細な比較はできないが、基本的には半倒焔式の窯構造から発展する饅頭窯へとつながる窯構造であり、また窯積み用の道具も三叉支具が検出されており、かなり共通した築窯・製陶技術が広がっていることが推測される［註44］。北方青瓷や中国白瓷の起源問題に関しては、冀中南、豫北地区の瓷器窯址の考古調査がさらに進展することで研究が深まるものと考える。

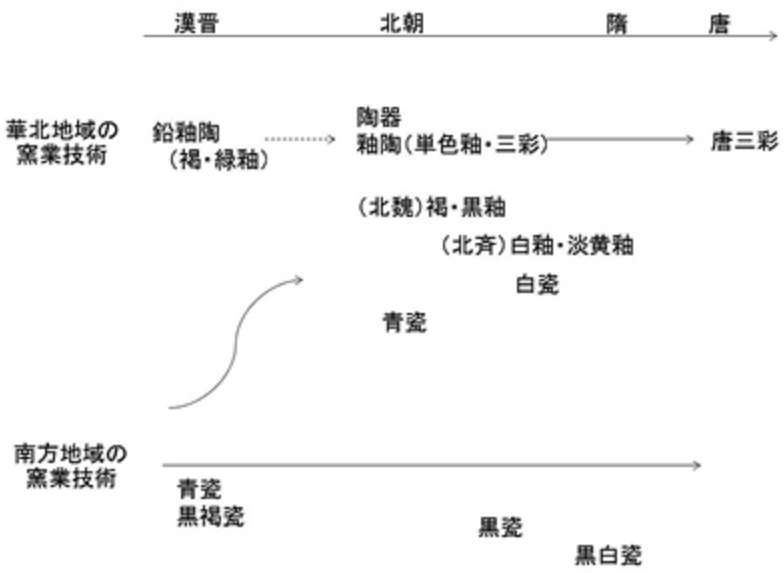
中国陶瓷史の中における北朝時代の陶瓷器の様相・様式の評価（①）

先述したように新中国成立以前は、北朝時代に関する陶瓷器資料は少なく、むしろ南方の古越瓷に注目が集まっていた［註45］。その要因としては、西晋の八王の乱以降、華北一帯は戦禍が続き、それにより中原の都市は経済が疲弊し、手工業生産も衰退したことで精美な工芸品が出現せず、結果として人々の興味の対象とはならなかったことにある［註46］。

新中国成立以降、当該期の華北地域の墓地資料が増加する中で研究は進展し、北朝時代に関して「隋唐時期における隋唐陶磁をはぐくむ母胎となったばかりでなく、そのあるべき様式を明確に示して、不動の祖型を構築していた」（矢部一九八〇［註47］）、あるいは「隋代30年の陶磁器は、前後数世紀の陶磁器の流れを一つに結びつける、「かなめ」の役割をもった」時代（長谷部一九八二［註48］）、「青磁・白磁・黒磁のどれをとっても、この時期にはすでに焼成可能になっており、その水準もたえず高められており、南方の磁業を迎え、すぐに追いあげていった。その結果、唐・宋時代に広く北方各窯が出現する基礎を準備した」（中国硅酸塩学会編一九九一［一九八二］［註49］）と評価されていることからも、隋唐時代の様式が確立する過渡期的な段階、あるいは漢代と隋唐代の陶瓷史の中間的な段階として位置づけられてきた。さらに後述する白瓷に関する問題の整理でもとりあげるが、北朝時代にも陶瓷生産・技術には変化があり、北斉時代の安陽范粋墓（武平六年〈五七五〉）出土に白瓷が出現していることや漢代からの系譜を継承する伝統的な鉛釉陶から唐三彩に連なる白釉緑彩陶の出現など、特に北朝の中でも北斉時代に大きな画期が見いだされることが指摘されることが多い［註50］。

つまり、北魏時代では北方地域は緑釉・褐釉などの鉛釉陶器、南方地域は青瓷（越州窯青瓷）を中心としており、中国の南北地域で製陶・瓷技術には顕著な差が存在する［第1図］。東魏時代に入ると多彩な様相を見せ、低火度の緑釉陶器と高火度の黒釉陶器が作られるようになり、北方地域でも製陶技術が進展する［註51］。そして当初は南方産の青瓷が華北地域にも流通しているが、北斉時代頃には、江南産の青瓷以外にも、華北産の青瓷も一定量見られることから、六世紀中葉頃、江南の青瓷に刺激され、独自の技術を模索した段階であるとする［註52］。

先にあげてきた②～④の論点から見ても、結論からすれば、やはり隋唐時代の陶瓷器の様式の初源的な要素が出そろうのは北斉時代であり、その様式の礎となっている段階としての評価が適当であると考える。



第１図　漢時代から隋唐時代の南北地域の陶瓷器の変遷（筆者作成）

二、出光美術館所蔵の北朝時代の作品

さて、前節では学史の整理と研究史の問題点にあわせ、各時代を特徴づける製品について触れた。本節では、出光美術館所蔵の北朝時代と思われる製品について、学史を踏まえて、陶瓷史における位置づけを再整理しておきたい［註53］。

1　青瓷天鶏壺

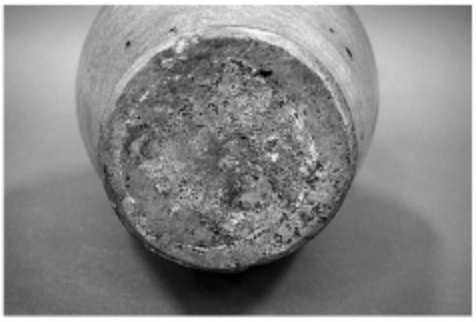
天鶏壺は三国時代の終わりから両晋・隋唐時代まで、形や釉調が変化しながらも、長期間にわたり作られてきた。本作品［第２―１図］は、細長い頸部に盤口がつく長頸壺（瓶）が基本なっており、盤口部には横並びの二頭の龍（蟠）頭がはんだ形の把手［第２―２図］、肩部には鶏頭形の注口部（後補）がつく、天鶏壺（あるいは鶏首壺）と称される壺（あるいは瓶・罐）である。肩の両側には梯形（橋形）の紐通しが二つずつつく［第２―３図］。全体に施釉された青瓷釉はよくとけ、釉層は薄く、釉面には細かな貫入が広がり、わずかに釉むらが見られる。底部付近には灰白色の胎がのぞく。注口は胴部と通じておらず、意匠的効果を意図していると考えられる。底部裏は釉薬をかけず露胎で、赤褐色を呈する。また輪状の窯道具に設置した痕跡が見られる［第２―４図］。なおほぼ同形同サイズのものが大阪市立東洋陶磁美術館にも所蔵されている［第３図］。

出土資料を中心に北朝から隋・初唐時代の罐・瓶類および天鶏壺の詳細な編年を行った亀井氏（二〇一四［註54］）の分類・編年観を参考にすると、本作品は胴部が倒卵形胴部で、橋形耳（系）［註55］をもつ形式の作例に位置づけられる［第４図］。このような天鶏壺は六世紀の第１四半期頃には、器高が三〇センチ未満のものが多く、それ以前の東晋の球形胴の器高のものと比べると大きくなりつつある［註56］。そして六世紀の第２四半期にはさらに大型化し、器高が四〇～五〇センチのものが目立つようになり、白色に近い胎土に青瓷釉がかけられることがその大きな特徴であり、また華北地域ではこの形式の出土例が多い［第４―３・４、６・７・８図］。出光美術館所蔵の本作品は造形的にも胎土、施釉の特徴もこれらに類似していることから、六世紀第２四半期頃を中心にした作例で

第 2 – 1 図　全体

第 2 – 2 図　口縁部（部分）

第 2 – 3 図　肩部橋形 2 耳



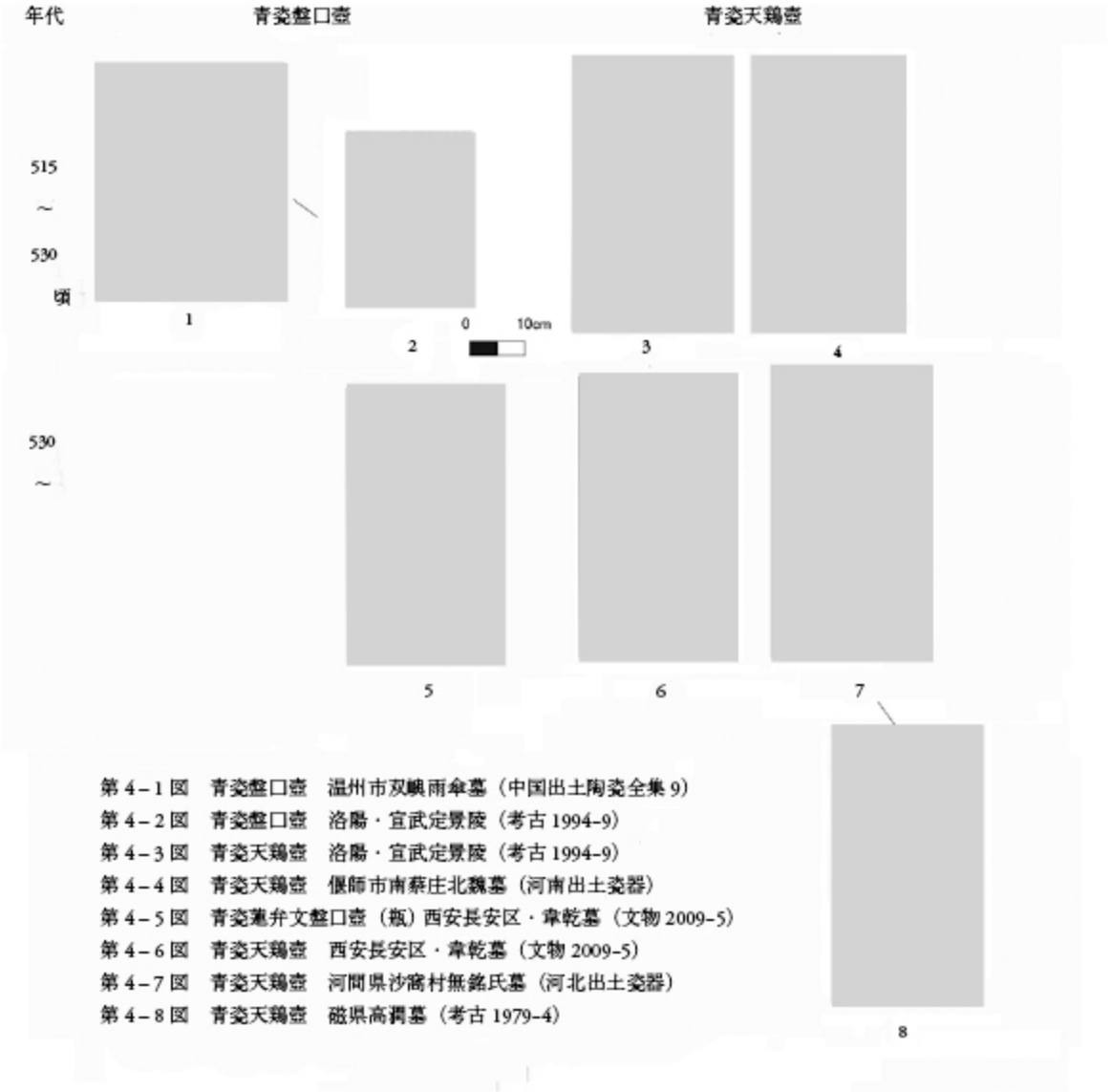
第 2 – 4 図　底部裏

第 2 図　青磁天鶏壺　南北朝時代（北魏）　高 47.2cm　口径 11.9cm　胴部最大径 23.2cm　底径 13.8cm　出光美術館蔵

第 3 – 1 図　全体

第 3 – 2 図　底裏

第 3 図　青磁天鶏壺　南北朝時代　高 48.0cm　大阪市立東洋陶磁美術館蔵



第 4－1 図　青瓷盤口壺　温州市双嶼雨傘墓（中国出土陶瓷全集 9）
第 4－2 図　青瓷盤口壺　洛陽・宜武定景陵（考古 1994-9）
第 4－3 図　青瓷天鶏壺　洛陽・宜武定景陵（考古 1994-9）
第 4－4 図　青瓷天鶏壺　偃師市南蔡庄北魏墓（河南出土瓷器）
第 4－5 図　青瓷蓮弁文盤口壺（瓶）西安長安区・韋乾墓（文物 2009-5）
第 4－6 図　青瓷天鶏壺　西安長安区・韋乾墓（文物 2009-5）
第 4－7 図　青瓷天鶏壺　河間県沙窩村無銘氏墓（河北出土瓷器）
第 4－8 図　青瓷天鶏壺　磁県高潤墓（考古 1979-4）

第 4 図　天鶏壺・盤口壺の変遷

形式名	細分	胴部形態	装飾	耳（系）	その他
刻花蓮弁文橋（角）形耳・環状（丸）耳罐		球形	胴部：刻花俯蓮弁文	橋形（横位）、環状（縦位）	
突帯貼付環状耳罐（肩・胴部：貼花突帯文、環状）	a	球形	胴部中位：鬚状突帯（縄絡文）	環状、橋形	
	b	球形	胴部上下：無文の突帯	環状。橋形耳を並立	突帯付近まで施釉
	c	球形	肩の突帯文が縄目文。あるいは無文の突帯文を肩と胴下部 2 カ所に貼花。	環形 4 耳の先端を両側からつまんで尖らすものある	
突帯文環状耳鼓腹（杏）形罐		鼓腹形	肩：沈圏線文 胴部中位：無文の突帯文	環形耳 3 ないし 4 つ	有蓋。胴下半は露胎

第 1 表　北朝から隋・初唐時代の青瓷・鉛釉罐・壺類の特徴（亀井 2014 をもとに筆者作成）

あり、また産地に関して、浙江省あるいは福建、広東方面などの南方産の可能性も排除できないが、華北地域産の青瓷である可能性が高いものと考えられる。なお、華北・北方地域における天鶏壺の出土状況の詳細に関しては、第四節で改めてとりあげる。

2　青瓷蓮弁文四耳壺

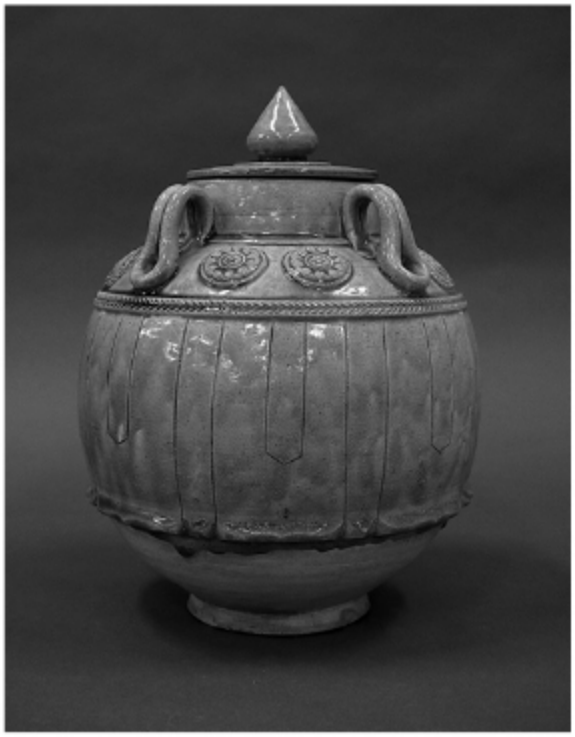
青瓷・鉛釉の壺・罐は北朝から隋・初唐時代に数多く見られる器種の一つである。本作品［第5―1図］は、口縁は高くたちあがり、肩から胴にかけて丸みを帯びながらも長胴状で、底には高台を作りだしている。肩には粘土紐を湾曲させて作った大きな環状の耳（系）が縦位に四方につき、耳と耳の間には貼花文が二つずつ配されている［第5―2図］。貼花文には連珠文とパルメット文（鬼面文のくずれたものか）があり、交互に規則的に配されている［第5―3・4図］。肩から胴にかけては縄紐文が二段にめぐり、胴部には蓮弁文が直線的に刻され、蓮弁の裾は尖り、器体から飛び出したようになっている［第5―5図］。器体には透明釉がたっぷりとかけられており、釉調はやや灰緑色を呈している。この四耳壺には大きな擬宝珠形の紐をつけた平蓋がともなう。器体の裾は釉がかからず、露胎となっている。

ところで北朝から隋・初唐時代の青瓷・鉛釉壺あるいは罐は、刻花蓮弁文橋形耳・環状耳壺、突帯貼付環状耳壺、突帯文環状耳鼓腹形壺の大きく三形式が知られる［註57］［第1表］。本作品は肩部の突帯貼付縄目文が特徴的な突帯貼付環状耳壺の一群の細分形式のc類に位置づけることができると考える。ただしまったく同じような作例の出土例は認められず、幅広に刻みだされた蓮弁文および蓮弁の内側の刻花文は李雲墓出土の白釉緑彩刻花蓮弁文罐（壺）に類似する［第6―8図］。また肩部の縄目文（綾杉文状である）も非常に丁寧に文様が刻まれており、類例は少ないが山東棗庄市中陳郝窯址の青瓷刻花蓮弁文［第6―12図］、また貼花文は伴わないがMOA美術館所蔵品などがある［第6―10図］。年代に関しては、蓮弁文の特徴は李雲墓（武平六年（五七六））に近いが、耳（系）は環状になっていることからこれよりさかのぼることはないと考えられ、北斉時代後期を上限、肩部に丁寧な縄目状の突帯文は隋時代の作例にはほとんど見られないことから、仮に隋時代に存在したとしても初期頃のものであろうと思われる。

3　青瓷蓮弁文六耳壺

本作品は、やや濃い緑色を呈する青瓷釉がかけられた壺である［第7―1図］。やや弧腹形であり、肩部から胴部中央にかけて、下向きに蓮弁文（刻花俯蓮弁文）をめぐらしている。大ぶりな蓮華の花弁は刻線により複弁となっており、胴部中央で弁先をはねあげている。蓮弁と蓮弁の間にはもう一重の弁先の表現がなされ、二重蓮弁文になっている。なお蓮弁文は合計一四弁作り出されており、やや細身の蓮弁である。また肩部から口縁部付近にかけて、環耳と橋耳がめぐっている［第7―2図］。環耳は口縁の四方に一つずつ取りつけられ、耳の中央に一条の刻線が入る。橋耳は環耳の間に一つないし、二つずつ交互に配されている。素地は赤みのある褐色を呈し、釉薬は壺の胴下部を残して全面にたっぷりとかけられており、蓮弁の刻線や弁先には釉だまりができている。全体に細かな貫入が見られる［第7―3図］。

これらの形態の特徴から本作品は、先の亀井氏の分類を参考にする



第5－1図　全体

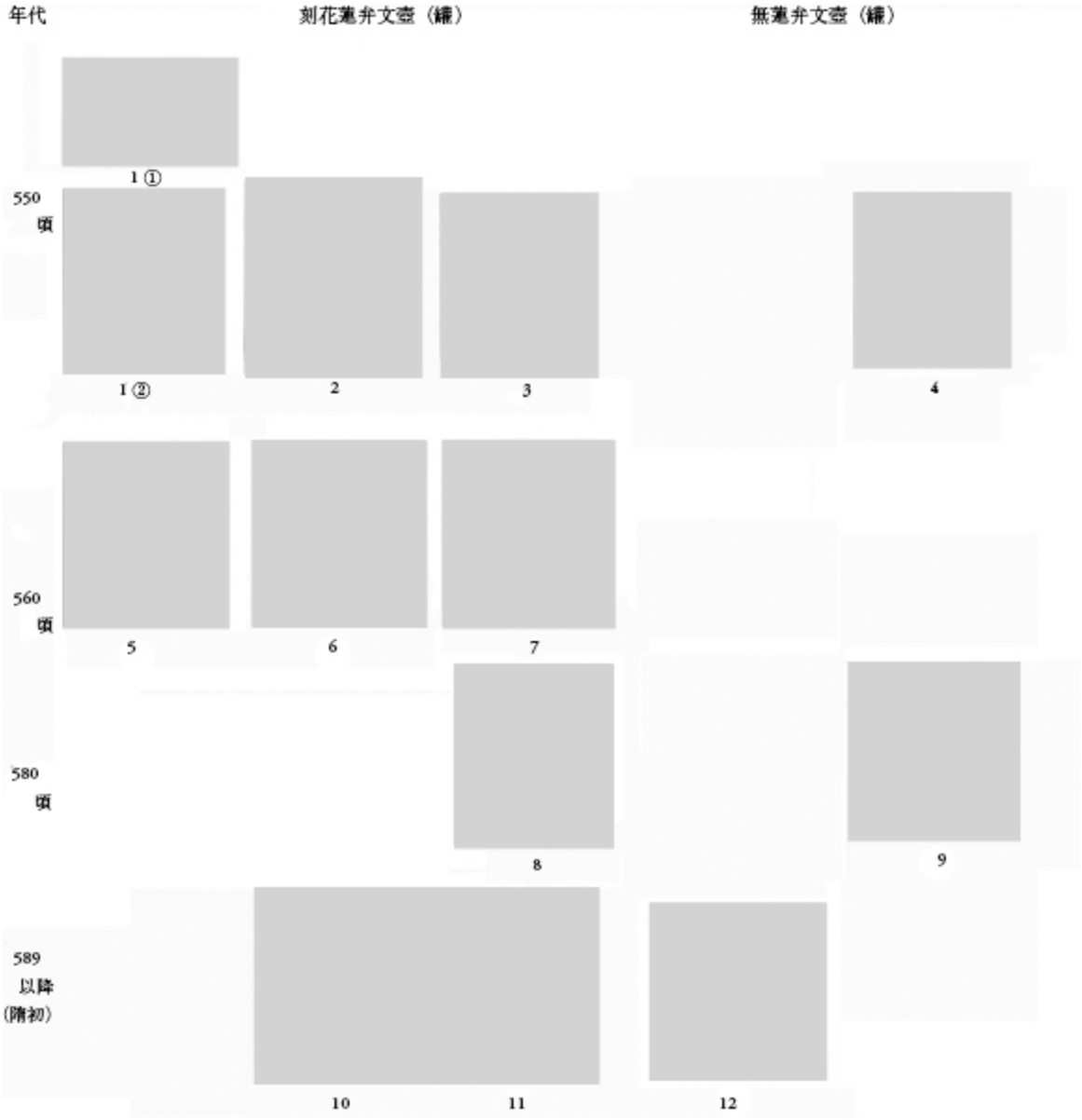
第5－3図　肩部貼花文①

第5－4図　肩部貼花文②

第5－2図　肩部の系と貼花文

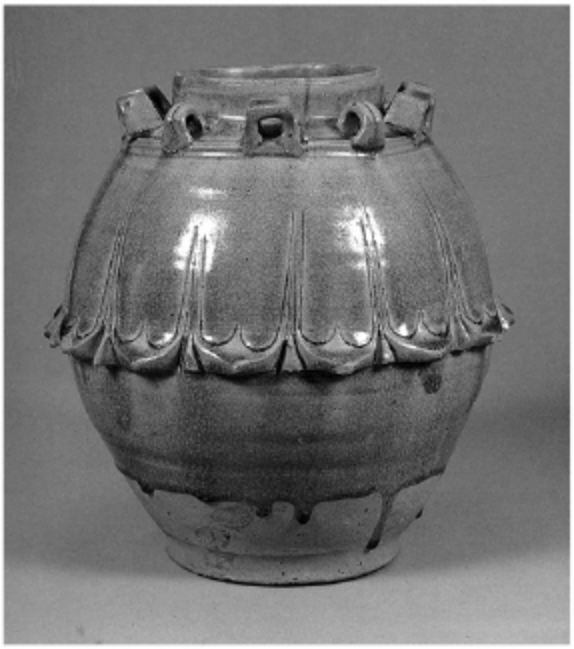
第5－5図　胴部の俯蓮弁文

第5図　青磁蓮弁文四耳壺　南北朝時代～隋時代　総高 32.3cm　高 26.4cm　口径 11.3cm　胴部最大径 24.5cm　底径 11.4cm
出光美術館蔵



第 6－1 ①図　青瓷刻花蓮弁文壺　茹茹公墓（550）（文物 1984-4）
第 6－1 ②図　青瓷刻花蓮弁文壺　茹茹公墓（550）（河北考古重要発現）
第 6－2 図　青瓷刻花蓮弁文壺　東京国立博物館蔵
第 6－3 図　青瓷刻花蓮弁文壺　佐野美術館蔵
第 6－4 図　青瓷刻花蓮弁文蓋壺　河北呉橋県小馬厳東魏墓（546）（河北文物 1980）
第 6－5 図　鉛釉刻花蓮弁文二彩壺　河北崔昂墓（566）（文物 1973-11）
第 6－6 図　白釉緑彩刻花蓮弁文壺　安陽范粋墓（575）（中国出土陶瓷全集 12 巻・河南）
第 6－7 図　白釉緑彩刻花蓮弁文壺　安陽范粋墓（575）（中国出土陶瓷全集 12 巻・河南）
第 6－8 図　白釉緑彩刻花蓮弁文壺　濮陽李雲夫妻墓（576）（中国出土陶瓷全集 12 巻・河南）
第 6－9 図　青瓷劃花文六耳壺　李雲夫妻墓（576）（中国出土陶瓷全集・河南）
第 6－10 図　青瓷刻花蓮弁文壺　MOA 美術館蔵
第 6－11 図　青瓷刻花蓮弁文壺　平邑県子村（山東文物 1996）
第 6－12 図　青瓷刻花蓮弁文壺　棗庄中陳郁窯址（中国出土陶瓷全集 6 巻・山東）

第 6 図　北朝時代後半から隋時代初頭の青磁・釉陶壺（罐）類



第7－1図　全体

第7－2図　上面より

第7－3図　底部裏

第7図　青磁蓮弁文六耳壺　北朝時代末～隋時代　高 28.4cm　口径 12.0cm　胴径 28.4cm　底径 14.0cm　出光美術館蔵

と刻花蓮弁文橋（角）形系・環状系罐（壺）の形式に属するものである。つまり「六世紀の中葉から出現し、罐（壺）の玉形胴部の上半部に蓮弁形を線刻で表現し、下半部を削り出して、間弁を入れた蓮弁文を雕出し、立体的に表出する。肩に橋形の四から六系（耳）を付ける」（亀井二〇一四［註58］）形式に属するものである。

本節2の作品でも見たように肩部の耳（系）が年代を考える上で重要であることを示したが、本作品は肩部の耳は橋形（横位）と環状（縦位）のものが共存している。同じ形式ではないが、突帯貼付環状系罐（壺）に橋形と環状の両方の系をあわせもつものが、例えば、山東省棗庄市中陳郝窯址［第6－12図］や江蘇建湖県上岡採集品、李雲墓（五七六年）などでも見られる。李雲墓出土のものは、当館所蔵のそれと比較すると鉛白釉緑彩罐（壺）との類似性が高い。李雲墓からは形式は異なるがやはり青瓷刻花蓮弁文罐（壺）が出土しており、先の亀井氏の指摘にあるように釉薬の種類は異なっていても、類似する器種・形式であれば変化の方向性が同じであることを考えると、当館所蔵の作品の年代の上限は、李雲墓の段階までさかのぼる可能性がある。しかし、表された蓮弁文は李雲墓のそれよりも幅が狭く、また数が多い。そのため時間的には若干下る（隋時代の初頭）可能性もあり、北斉時代後期から隋時代初頭の頃の作例であると考えられる。また全体的に精緻な作りであることから、華北地域の中でも河北や河南地域の窯で焼造された可能性が高いものと推測される。

4　緑釉貼花文壺

緑釉をまとった高さ五五センチにもおよぶ大形の壺である［第8－1

第 8 –1 図　全体

第 8 – 2 図　口縁端部

第 8 – 3 図　鼓を叩く人物

第 8– 4 図　笛を吹く人物

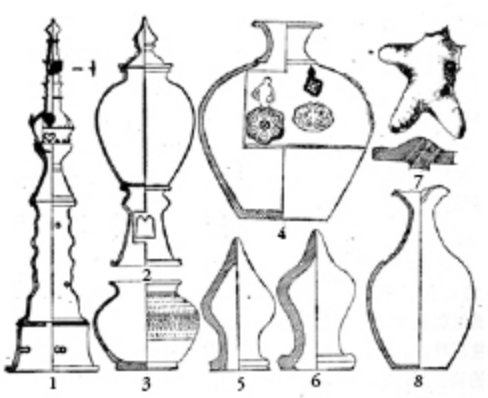
第 8 – 5 図　箜篌を弾く人物

第 8– 6 図　獣首文

第 8 – 7 図　口縁部の目跡

第 8– 8 図　底部裏

第 8 図　緑釉貼花文壺　隋時代　高 55.1cm　口径 21.3cm　胴径 44.3cm　底径 22.3cm　　出光美術館蔵



第９図　河北蔚県九宮口唐墓（Ｍ１）出土遺物および緑釉壺（考古 1993-8）

第10図　緑釉壺　６世紀
ヴィクトリア＆アルバートミュージアム蔵
© Victoria and Albert Museum, London.

図］。器壁を厚くし、頸部は太く、口縁部は外反している。また口縁端部は中央が凸状になっている［第８―２図］。口頸部と体部は別々に作られ、頸部で接合されており、頸部下端に突帯がめぐっている。胴のまわりには八つの大きな貼花文が飾られている。それらは翼をもった人物が四面あり、それぞれ鼓［第８―３図］や笛［第８―４図］、笙篌［第８―５図］をもった楽人である。楽人と楽人の間には獣首文［第８―６図］が飾られる。翼をもった人物などの表現は西方的な意匠であり、中国的要素と融合した雰囲気をもっている。釉薬は全体に施されているが、やや釉むらが見られ、貫入が入る。また口縁部と底部裏には三ヵ所目跡と思われる痕跡が見られる［第８―７・８図］。

さてこの作品の年代に関しては当館ではこれまで一つは北斉時代から隋時代、もう一つは唐時代と考えてきた。その根拠は一つ目は、胴部の特徴が類似するフリア・ギャラリーや常盤山文庫が所蔵する緑釉壺のような隋時代の作例としての評価であり、二つ目は唐時代の河北蔚県九宮口墓罐（壺）に類似するという考え方である。現在における出土状況からすると唐時代の作例であると考えられる。

まず後者、唐代に比定する考え方の根拠としては、河北蔚県に所在する九宮口唐墓（Ｍ１）［註59］から出土した緑釉罐に類似するというものである。九宮口墓は塼室墓であり、銅器二三点、陶器八点、瓷器一点が副葬品として出土している［第９図］。このうち、緑釉陶罐は、高さ四八センチと大型で、頸部と胴部は別作りで、また肩から胴部中央に型作りによるパルメット文様（あるいは蓮華文）、獣首、飛鳥文が大小異なるサイズのものが二四つ貼付けられている［第９―４・９図］。実見していないため詳細は不明であるが、器壁の厚さや、口縁端部の特徴などは当館蔵

のそれと共通している。

一方前者について見てみると、やはりまったく同一の特徴のものは見られないが、隋時代の作例と考えられるヴィクトリア&アルバートミュージアム所蔵の緑釉の花文瓶の胴部に装飾された貼花の獣首文［第10図］と、当館所蔵の獣首文は類似する。また同じく楽器をもつ人物（頭髪・翼など）の表現は、やはり隋時代の作例と考えられるフリア美術館［第11図］や根津美術館［第12図］が所蔵する緑釉壺・罐類のそれに類似する。また緑釉の製品ではないが、口縁部の形態が浙江省嵊県雅致村の「大業」二年（六〇六）銘の墓室墓から出土した青瓷壺［第13図］と類似する。

第11図　緑釉壺　6世紀　フリア美術館蔵

第12図　緑釉壺　6世紀　根津美術館蔵

第13図　青磁球形胴盤口壺　浙江省嵊県雅致村墓室墓　隋時代（文物1987-11）

第 14 –1 図　全体

第 14 – 2 図　口縁端部

第 14 – 3 図　側面

第 14 – 4 図　正面。一対の龍文

第 14 – 5 図　底部裏

第 14 図　白磁双龍文扁壺　北斉～隋時代　高 20.4cm　口径 6.2cm　胴径 17.4cm　底径 13.5cm　出光美術館蔵

第 15 – 1 図　全体

第 15 – 2 図　底部裏

第 15 図　白磁鬼面唐草文扁壺　高 9.8cm　口径 3.4cm　胴径 8.1cm　底径 6×3.2cm　北斉時代末～隋時代初
出光美術館蔵

しかし、当館所蔵作品の壺に貼り付けられた人物俑（女性俑）の髪形は［第8―3・4・5図］、盛唐期から晩唐期に見られる人物俑のそれと共通している。釉調や製作技法には北斉時代末から隋時代の特徴を残すが、貼花文には盛唐から晩唐期の新しい時代の要素を残していることから、当館で所蔵するこの緑釉の大壺は唐時代である可能性が高い。

5　白瓷双龍文扁壺

6　白瓷鬼文唐草文扁壺

当館は二点、類似する形態の白瓷扁壺を所蔵している。

一点は、厚めに施釉された白瓷扁壺である［第14―1図］。その形態の祖型は西方産の銀器であると推測される。型押し成形で作られ、器壁はかなり厚く、両肩部に紐を通す穴が開けられているが、形式的には退化したタイプでオリジナルの名残であると思われる［第14―2・3図］。ほぼ円形に近い器側面中央には、パルメットと連珠文をめぐらしたメダイヨンを配する。またその左右にはS字状に身をくねらせた、一対の有翼の倒立した龍が表されている［第14―4図］。龍の側面には連珠文帯が二条みられ、その外側には連珠文帯をもうけ、一番外側に小円文をめぐらせる。さらに肩部には重圏円を連ね、頸部は円の四方に如意頭文様をあしらった花文様を装飾している。外側に張り出した高台は反転を繰り返す円弧の文様で飾られている。白色の素地にやや黄味の強い白瓷釉がかなり厚くかかっている。底裏は無釉で露胎である［第14―5図］。

龍文に関しては新疆ウイグル自治区に所在する四～六世紀前半や六〇〇年前後の石窟内に描かれた天象図における文様とその構図との関係性を指摘されている［註60］。特にこの龍の文様はイラン系の怪鳥とされる金翅鳥に原型が求められること、また主文様のまわりに、四種類の文様を配しているという構図が、両者は非常に類似しているということである。構図が崩れていないという意味において、この白瓷扁壺の製作年代はやはり比較的古いということが考えられる。

もう一点は、先述の白瓷双龍文扁壺よりも小振りではあるが、同様に型作りの扁壺である［第15図］。主文様の内容は異なるが、鬼面文を主文様、その周囲に印花文により唐草文、その外側には珠文を回しており、その文様の構成や構図は先述した白瓷双竜文扁壺よりやや崩れているが、比較的共通していることから、同時代かやや新しいものと思われる。

このような形態の白瓷扁壺は北斉時代から唐時代まで見られ、当館所蔵の二点の作品については、これまで隋・大業四年（六〇八）の墓誌をもつ西安・李静訓墓出土の作例にも類似することが指摘されている。しかし、先にあげた文様構成なども念頭にいれ、現状では北朝時代後期から隋時代の作例と認識しておきたい。

三、北朝時代の陶瓷器の流通の様相

本節で扱う陶瓷器は圧倒的多くが墓地出土の副葬品である。そのため日常的に流通する陶瓷器の様相ではないが、墓の副葬品は時代の流行や地域、あるいは社会的階層の差違を顕著に示している可能性が想定される。また北斉時代においては都の鄴城と副都の晋陽（太原）の性格の差違があり、その差違は墓葬様式にも反映され、陶瓷器あるいは陶俑に地域性が存在していることが明らかにされている［註61］。ここでは近年の資料あるいは周辺地域の状況も含めて、陶瓷器の流通の様相を整理して

おく。なおここで取り扱う地域は河北、河南、山東、陝西を中心とし、内蒙古や甘粛地域は含まない。

また巻末にはそれらの地域の北魏、東魏、北斉、北周墓地から出土した陶瓷器の一覧表を掲載した。報告書の内容をもとに青瓷、白釉（瓷）類、鉛釉陶器、三彩、無釉陶器と大別した。ただし、附表中の鉛釉陶器の項目内の黒釉陶器は、高火度焼成のものも含まれる可能性もあるが、多くは低火度の褐色を呈するものと思われる。また白釉（瓷）類も多くは鉛釉陶であると思われるが、各報告上ではそれぞれ区分されていることから、ここでもその表現を用いている。また青瓷に関しても青釉・青黄釉と記載されているものを主に掲載しているが、図版などから青瓷でない可能性が高いものに関しては鉛釉陶の部分に掲載した。このため、この一覧表は今後修正を必要とすることはいうまでもないが、時代的あるいは地域的な傾向を把握する上では重要であると思われる。

1　北魏時代の様相

北朝時代において最も多くの報告がなされているのは現状では北魏時代である。基本的には墓の副葬品である。

北魏時代の墓の分布は、洛陽遷都以前の平城時代は基本的に大同地域が中心である。そして大和十七年（四九三）に洛陽に遷都以後は大同地域のみならず、大行山脈東麓の河北省北部地域、河南省洛陽地域、山東省淄博地域、関中地域などに広がっている。

(1)　平城時代［第16図］

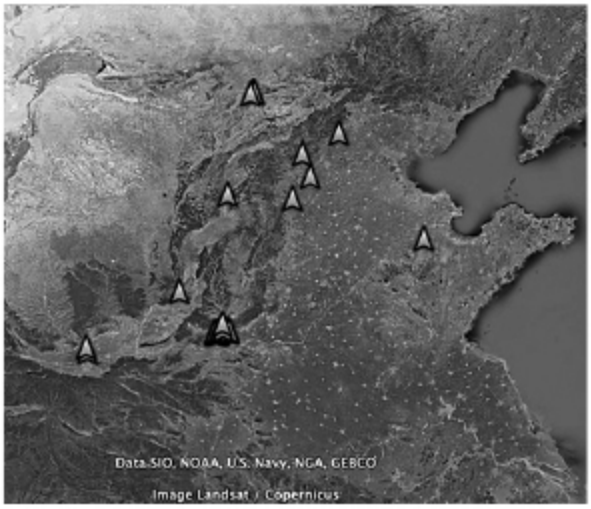
平城時代に副葬された陶瓷器の種類としては、鉛釉陶器、灰陶・紅陶とわずかな青瓷類である。鉛釉陶器に関しては、西晋以降その流通量が減少していることは学史の整理でも触れたが、少なくとも山西大同地区では太延元年（四三五）の無名氏墓［註62］の黄褐釉壺や尉遅定州墓［註63］の太安三年（四五七）から醤褐釉壺などが出土しており、五世紀の前半から中頃には鉛釉陶の焼造と副葬例が増えていく傾向にある。五世紀第2四半期から第3四半期には例えば司馬金龍夫婦合葬墓では俑も含めると三〇〇点以上の鉛釉陶器が副葬されていることからも、その傾向は顕著である。鉛釉陶器の多くは黄褐色の低火度焼成による壺が多く、肩部に耳（系）をつけるものも見られる。なお鉛釉陶器を副葬する習俗と焼造技術については、西安市雁塔区後趙墓M7出土の緑釉鶏・鴨などの事例が見られることから、大同地域の独自の技術ではなく、関中地域の十六国後期の文化的影響受けている可能性が指摘されている［註64］。

またこれらの鉛釉陶器の器形は盤口やラッパ口の短頸壺や細頸壺が多く、釉薬は器表全体に施釉され、器の底部裏には目跡が三つ見られるものが多い。これらの形態は施釉を行わない灰陶の壺（あるいは瓶、罐とも報告されている）とも共通している。墓地におけるこれらの鉛釉陶・灰陶の組合せは大同地区の北魏墓に多く見られることから、これらは拓跋氏の伝統的な形式であるとの指摘もある［註65］。なお青瓷の出土例は司馬金龍墓出土の唾壺1点と基本的には非常に少ない［註66］。

(2)　洛陽遷都後

洛陽地域を中心に大同地域、大行山脈東麓の河北省北部地域、山西省西南部地域、山東省淄博地域、関中地域などに広がっている［第17図］。

鉛釉陶器の出土例は少なく、ほとんどの墓地が盗掘を受けていること



第16図　北魏平城時代に陶瓷器を出土する墓葬分布図
（△は墓地の所在地）

第17図　北魏洛陽遷都後に陶瓷器を出土する墓葬分布図
（△は墓地の所在地）

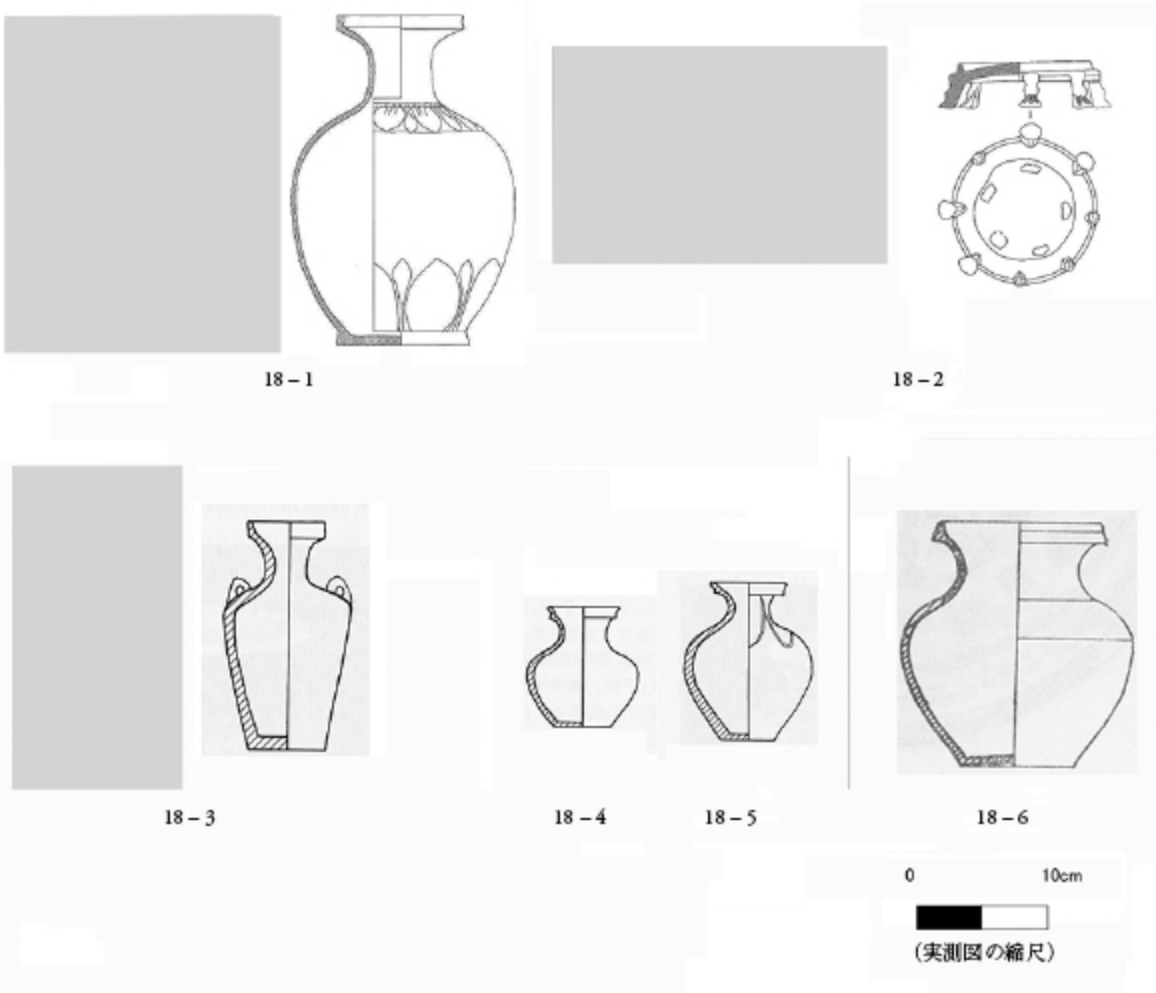
に要因があるものと思われる。出土している鉛釉陶器は、無名氏墓であるが洛陽に隣接する偃師等で黄褐釉や醤褐釉が施釉された盤口壺が確認されているほか、河北賛県李翼夫婦墓M4（建義元年〈五二八〉）などでも確認されている［第18―1図］。耳（系）の有無にかかわらず盤口壺の器形は、肩がはり底部にかけてゆるやかに収束するという形態的特徴はおおよそ共通しているが、賛県李翼墓のものは肩部と底部に蓮弁文が刻花により表され、洛陽出土のそれらはいずれも無文である。これが洛陽と河北省北部地域との地域差であるのかは資料が少ないため不明である。また偃師M3の肩部に耳（系）をつける壺（瓶）は［第18―3図］、北斉時代の河北堯趙墓［註67］に類似したものも見られ、後の時代へと続く形態のものが見られる。

この他、北魏時代後半には青瓷（報告書では青釉瓷、青釉陶と記述されることが多い）の出土量が明らかに増加している。その種類は罐・壺類、唾壺、碗類、水盂類が見られる。多くの墓地は盗掘を受けているため、その組成が当時の組成をすべて反映しているわけではないが、以下のような傾向が現状で看守できる。

洛陽地域ではいわゆる天鶏壺と称される龍柄を口縁部から肩部にかけて有する盤口鶏首壺（瓶）、四耳盤口壺、唾壺などの壺・瓶・罐類と燭台、そして碗・盤類である。

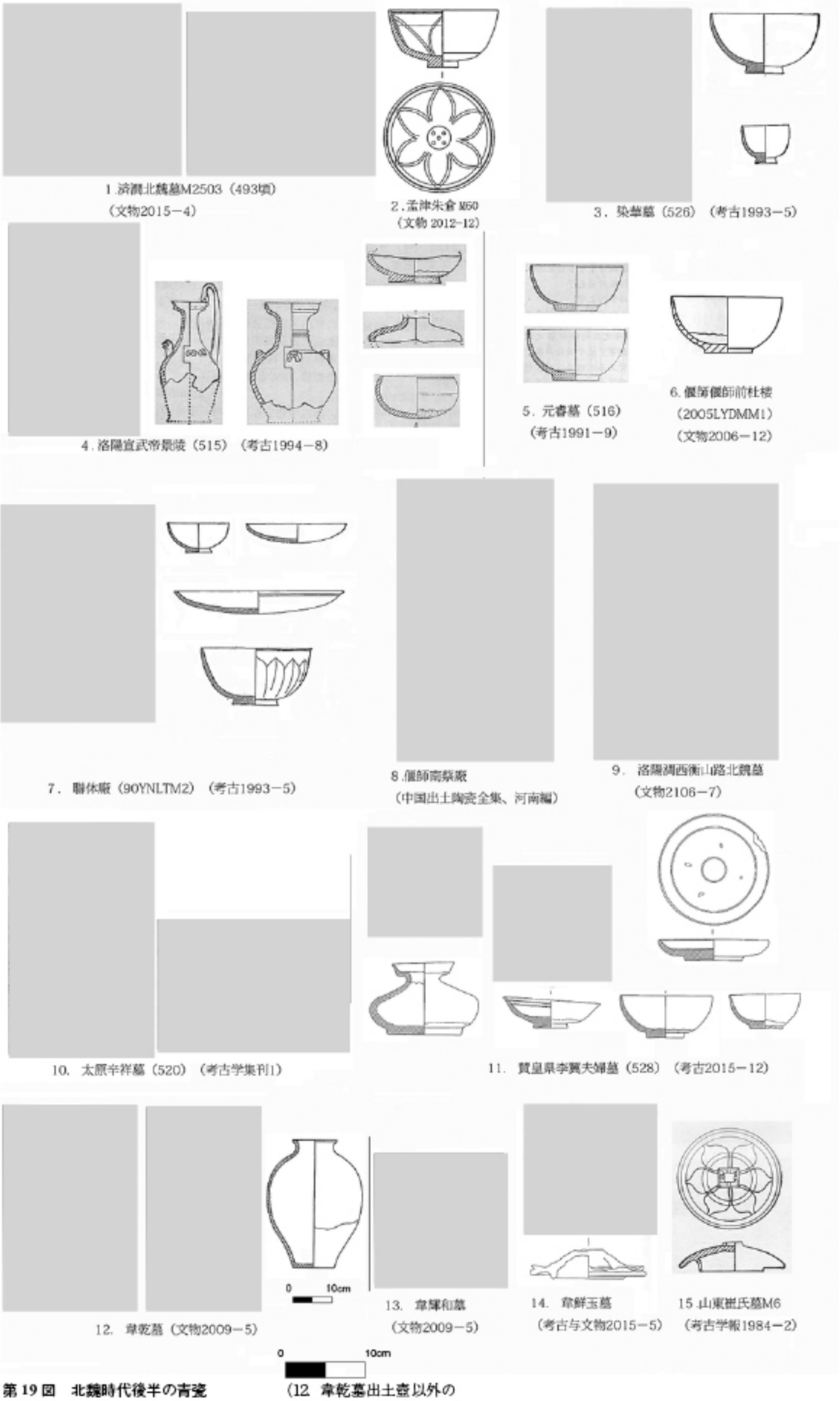
太原地域では辛祥墓夫婦合葬墓［註68］（神亀三〈五二〇〉）で青瓷盤口鶏首壺と青瓷蓋托、大同地域では市沙嶺新農村無名氏墓［註69］（M23）で青瓷碗が確認されている。

河北省北部地域（河間県邢偉墓［註70］、賛皇県李翼夫妻墓［註71］）では、唾壺と碗・盤類が確認されている。李翼墓（建義元年〈五二八〉）出土の盤



第 18－1, 2 図　河北贊県李翼墓出土（考古 2015-12）
第 18－3 図　河南洛陽孟津朱倉北魏墓 M3 出土（文物 2012-12）
第 18－4, 5 図　河南洛陽孟津朱倉北魏墓 M51 出土（文物 2012-12）
第 18－6 図　河南偃師市杏園庄無名氏墓（YD Ⅱ M926）（考古 1991-9）

第 18 図　北魏時代後半の釉陶器



第19図　北魏時代後半の青瓷

（12．韋乾墓出土壺以外の
すべての実測図の縮尺）

の内底には刻花蓮弁文が配されている。

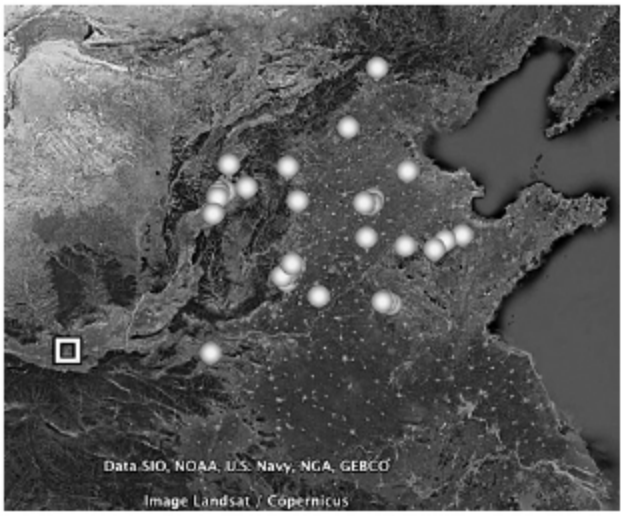
なお天鶏壺、盤口壺などは現状では見られない。

山東省臨淄地域では壺類は見られない。ただし、青瓷天鶏壺を模倣した陶製の橋形双耳罐や青瓷獅子形水盂が崔猷墓［註72］（太和十七年〈四九三〉）で確認されているほか、周辺の崔氏墓［註73］から刻花蓮弁文蓋、高足盤などが検出されている。

関中地域では北魏墓自体の報告例が少ないが、西安市長安区に所在する韋輝和墓［註74］（永熙二年〈五三三〉）や韋乾墓［註75］（永熙三年〈五三四〉）などから青瓷盤口天鶏壺（瓶）、青瓷盤口長頸壺、青瓷罐、青瓷唾壺、刻花蓮弁文が施された蓋が発見されている。

このように北魏時代後半の墓地出土の青瓷類に関していえば、青瓷の出土量が平城時代と比べると増加していることは一目瞭然である［第19図］。都の洛陽周辺ではその他の地域と比べると出土している種類や量が多い傾向にある。またこの時期より見られるようになる盤口の天鶏壺は耳（系）を肩部にもつが、いずれも橋形で複数のものである。瓶・壺類に関しては洛陽・関中地域に偏る傾向がある。これは副葬品が階層性とも結びついていることから、社会的な階層や当時の勢力関係と関係している可能性も想定される。また碗類や蓋の表面は無文のものが多い中で、内面あるいは外面に刻花蓮弁文を有するものも見られる。蓮弁を表現しているものの、その意匠はそれぞれに異なっており、別々の地域で焼造されていたことを示唆させるものでもある。

以上、先述した鉛釉陶器類の様相もあわせて見てみると、共通した様式は広く共有されているものの、青瓷の壺・罐類には出土する地域に偏りが見られる。また理由は不明であるが、この段階で一時的に鉛釉の製品が少なくなっている状況が見られる。その他、基本的に無釉の陶器類の組合せは壺（罐、瓶）類と碗皿類に加え陶灯［註76］が含まれるようになる。



第20図　東魏・北斉・北周時代に陶瓷器を出土する墓葬分布図
（○は東魏・北斉の墓地、□は北周の墓地の所在地）

2　東魏・北斉・北周時代の様相［第20図］

東魏・北斉時代の地域性に関しては、鄴城を中心とする京畿地区、晋陽を中心とする并州地区（太原）、冀・定・滄・幽地区（河北省北部）、青・済地区（山東省青州から済南一帯）の四つの地域に墓葬様式から区分でき、さらに五六〇年前後を境にして前期と後期に分かれる。前期にはそれぞれの地域性が顕著で、後期になると京畿地区の影響が色濃くなることが指摘されている［註77］。また墓に副葬される俑に関しても、北斉の陶俑

は都の鄴と副都・晋陽とは様式が異なっている［註78］。鉛釉陶器の容器類に関しては鄴城を含む河北・河南と晋陽を比較すると前者には大型器種が少ないことや四耳壺が主体であること、刻花文装飾が多いこと、黄釉褐彩が多いという特徴がある［註79］。その一方で鉛釉陶器における肉厚の貼花文装飾は「北斉山西省の鉛釉陶器の特徴」であり、また山東省地域の鉛釉に関して山西地域との共通性が指摘されている［註80］。

ここで新ためて墓葬における地域性が指摘されている地域ごとの陶瓷器の様相を確認しておきたい。

(1) 都・鄴城を中心とする京畿地域［第21図］

東魏時代から北斉時代を通じて、四耳壺が多く、その装飾は刻花により行われている［註81］。それらの四耳壺は鉛釉のものが多く、青瓷も同様に見られる。また北斉時代後期の五七〇年代頃には緑彩を施すものも多く見られるようになり、四耳壺のみならず唾壺、罐、長頸壺などにも用いられている。盤口の四耳壺は、堯峻夫妻墓（五七一）、褐釉天鶏壺は高潤墓（五七六）に出土例があるが、当該地域での出土例は少ない。碗、盤類は無文のものが多いが、元良墓（五五三）の青瓷高足盤には精緻な宝相華文が表されているものも見られる。なお胎は白色を呈するものが多い。

(2) 副都・晋陽およびその周辺地域［第22図］

大型の器種が多く、最も顕著な形式として天鶏壺と灯が見られ、その他にも尊形瓶などがある。また盤なども口径が三〇センチを超えるようなものも多い。報告書では青釉あるいは青瓷として報告されているものがあるが、いずれの器種も基本的には鉛釉陶であると思われる。出光美術館が所蔵するような青瓷の天鶏壺は無文で橋形双耳のものが多いが、当該地域の鉛釉の天鶏壺は共通するような形態のものもあるが（侯莫陳墓・天保六年〈五五五〉）、刻花による覆蓮弁や貼花による装飾が多い。また耳部にも文様を施す例が多い。貼花による装飾は壺や尊形器、さらには灯の座部にも貼花により蓮弁文が配されるなど、器の文様が非常に立体的に見えるような効果を生み出しており、華やいだ雰囲気をみせる。また緑彩を施す作例（婁叡墓）は非常に少ない。

(3) 定冀滄幽地域［第23図］

東魏時代の高雅夫婦合葬墓（天平四年〈五三七〉）は褐釉の天鶏壺、罐類、碗類や封柔夫妻合葬墓（武定四年〈五四六〉）では青瓷とされる耳付罐と盤口耳付壺、高長命墓からは青瓷碗が出土している。高雅夫婦合葬墓の壺（罐）類などは北魏時代のものと類似する。また天鶏壺は橋形双耳であるが、胴部には一周凸帯文がめぐり、その上には刻花により蓮弁文が配されており、北斉時代以降に胴部に装飾を行う晋陽地区で見られる天鶏壺との関係を想定させる。一方で、封柔夫妻合葬墓では胴部が丸みを帯びた青瓷蓮弁文六耳壺、青瓷盤口四耳壺が確認されており、それらは京畿地方で出土する形態に近い。北斉時代にいたっても四耳壺が多い傾向にあるが、封子絵墓の貼花尊形瓶や口径の大きい盤などもわずかに見られる。また緑彩の製品が見られないことも、晋陽地域と共通する特徴といえる。

第 21 図　東魏・北斉時代の青瓷・鉛釉陶器－京畿地域

第 22 図　東魏・北斉時代の青瓷・鉛釉陶器－太原周辺地域

第23図　東魏・北斉時代の青瓷・鉛釉陶器ー定窯澗幽

(4)　青・斉地域［第24図］

東魏時代の墓地として房悦墓（興和三年〈五四一〉）、賈思伯夫妻墓（武定二年〈五四四〉）などがある。房悦墓からは黄釉長頸瓶、褐釉唾壺、黄釉灯、青瓷碗などが出土している。このうち黄釉長頸瓶は北魏時代からの雰囲気を残す形態のものである。賈思伯夫妻墓の青瓷四耳罐［註82］は鉛釉であるが京畿地方の堯趙墓（武定五年〈五四七〉）出土のそれとほぼ同形態である。北斉時代の墓地としては崔芬墓（天保二年〈五五一〉）からは青瓷橋形四耳天鶏壺、青瓷蓮弁四複耳罐、青瓷豆、青瓷碗が出土している。罐や豆、碗などは京畿地方の特徴と類似性が高い。また天鶏壺は無文であり、晋陽地域の貼花文を施すそれとは様子を異にする。

また五七〇年頃の墓地と推測される淄博和庄の無名氏墓からは、青釉の蓮花瓷尊、外面に刻花蓮弁文碗、無文の青瓷碗が出土している。蓮花瓷尊は高さ五九センチにもおよぶ大型の製品である。類品が河南省上蔡県、湖南省武昌南朝墓三九二号墓、封氏墓などに出土例がある。しかし、本作例は文様装飾が貼花文のみで行われており、時代差があるとともに産地の差もあるものと思われる［註83］。しかし、いずれにせよ青・斉地域ではほとんど出土例が確認されていない。

ところで、出土した遺跡の性格は不明であり、地域も青・斉地域の範囲とは異なるが、山東省西南部の兗州地域からも北朝時代後期から隋時代初期頃の青瓷の出土例がある。無文の天鶏壺、頸部から胴部中央にかけて獣面文を貼花する天鶏壺、頸部に菊花文を刻花により表し、肩部の六つの耳の下に二段に刻花により草花

文を表した盤口壺、胴部中央のやや削り出しが鈍い刻花蓮弁文四耳罐が出土している。これらは棗庄市中陳郝窯、淄博寨里窯、臨沂市朱陳窯など、山東地域で焼造された可能性も指摘されている。現状では山東地域では北朝時代の保存状況の良好な遺跡の報告事例が少なく、詳細な検討はできないが、それらの製品がどの範囲まで流通しているのか、今後の事例の増加を待ちたい。

(5) 西安地域［第25図］

北周の領域である西安地域は、東魏・北斉の領域に見られる陶瓷器とは様相は大きく異なる。青瓷、鉛釉陶器ともに副葬品中にはほとんど見られない。王徳衡墓（建徳五年〈五七六〉）からは青瓷橋形四耳盤口瓶と青瓷碗十四点が出土している。独孤藏夫妻墓（宣政元年〈五七八〉）からは青瓷蓮弁文橋形六耳盤口瓶、青瓷碟、青瓷深腹形碗、白瓷盤口唾壺、褐釉盤口四耳壺、黒釉盤口唾壺、また同年の若干雲墓からは青瓷唾壺、褐色盤口四耳壺が出土している。叱羅協墓（建徳三年〈五七四〉）からは三彩奩の破片と瓷盆が出土している。唾壺や盤口瓶あるいは青瓷碗などは東魏・北斉の地域で見られる製品とも形態的な類似度は高い。一方で、例えば高さ三二・五センチの青瓷蓮弁文橋形六耳盤口瓶は、器形そのものは封子絵墓出土のそれに類似するが、胴部に耳付罐や天鶏壺で配するような蓮弁を彫り出すなど、独自の型式を生み出している。また胴部が球状を呈する褐釉盤口四耳壺も、東魏・北斉の領域で見られるタイプは直口のものが一般的であるが、盤口になるなど独自性が見られる。いずれにせよ、青瓷、鉛釉ともに副葬する事例が少なく、また大型の製品も見られない。

東魏・北斉の地域で青瓷、鉛釉陶器ともに副葬する事例が多い事象と比べると、それらを副葬したり、あるいは流通する製品や陶瓷器の製作や使用に関する情報そのものが大きく異なっている。

3 小結——考察にかえて［第2表］

以上、墓地に副葬された陶瓷器、特に青瓷と鉛釉陶器の様相を地域ごとに見てきた。

北魏の平城時代では、鉛釉陶器の盤口やラッパ口の短頸壺や細頸壺および灰陶類が副葬され、青瓷は基本的には見られない。墓の分布は都・平城が所在する大同地域に偏っているため、それらの陶瓷器もほぼ大同地域で見られる。

洛陽遷都後は、青瓷の出土量が増加している。その一方で、鉛釉陶器が減少しているように見えるが、その理由は不明である。この時期から洛陽地域を中心に天鶏壺や四耳盤口壺、唾壺などの壺・瓶・罐類と燭台、そして碗・盤類と器種が豊富になっている。天鶏壺などの大型の製品は都・洛陽と地理的に隣接する西安、および晋陽（太原）周辺で主に出土している。青瓷は基本的に無文であるが、碗・盤類には刻花蓮弁文を施文するものも見られる。青瓷類は南方産のものもあると思われるが、華北地方に分布する天鶏壺は、器形や特徴が類似しており、比較的数も多いことから華北地域で作られていた可能性が高いものと思われる。いずれにせよ政治的な中心地域で器種が豊富であり、それが地域性として表れている。

東魏・北斉時代は、墓葬構造による地域性と陶瓷器におけるそれはほぼ相関しており、都・郭城が所在する京畿地域、副都・晋陽の所在する

第 24 図　東魏・北斉時代の青瓷・鉛釉陶器ー山東（青・斉）地域

第 25 図　北周時代の青瓷・鉛釉陶器ー西安地域

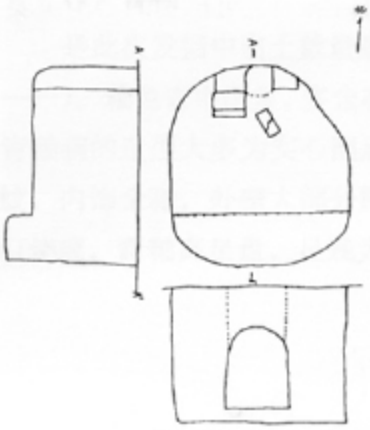
晋陽地域、河北省北部から北京地域の定州・冀州・瀛州・幽州地域、山東省の青州・斉州地域、さらには北周の領域の西安地域では陶瓷器の組成が異なっている。まず東魏・北斉と北周では、前者は副葬する陶瓷器類が多いのに対して後者は非常に少ない。類似したような器形や青瓷の出土例は見られるが、その形態や文様構成も異なっている。

次に東魏・北斉の領域内においては、全体的に淡黄色や白釉が流行し、胎も精緻な白色の胎の上に施釉を行うという共通した特徴をもつ。しかし、その一方で京畿地域と晋陽地域で地域性も存在している。京畿地域ではより精緻な胎土で、器形としては四耳壺が多く、また刻花文による装飾や黄釉緑彩の製品が特徴である。一方で、晋陽地域ではやや粗製な胎土が多く、また器高や口径の大きいサイズの鉛釉陶器で、貼花による装飾が顕著である。定冀瀛幽州地域や青斉地域は京畿地方の影響が強いながらも、晋陽地域で見られるような大型な製品を副葬する墓も見られる。鄴と晋陽における地域性に関しては、俑に関しても同様なことが指摘されている。小林氏（二〇〇八）［註84］は鄴が東魏には都となり、北魏洛陽の文化的伝統を継承しながらも、都（鄴）と副都（晋陽）にそれぞれに宮殿が造営されたことから、俑をはじめ明器生産工房もそれぞれに設置された可能性が高いと指摘されており、俑以外の陶瓷器類についてもその動態と連動していることを示しているものと想定される。

京畿地域の陶瓷器生産を改めて注目しておくと、都・鄴城地区で臨漳曹村窯址の存在が、近年明らかにされている［註85］。曹村窯址は、河南省安陽県に所在し、東魏―北斉時代の皇族陵区から約九キロ程離れた地点に位置する。このうち李江氏の報告では、東魏―北斉時代の合計六基の窯址が検出されている［註86］。窯体が報告されているＹ１は南北二・一五×一・九メートル、残高一・二メートルであり、饅頭窯の構造である［第26―1図］。窯址からは木灰層が検出されており、燃料が薪であったことがわかっている。製品としては青釉、陶片、青磚、釉陶（黒釉）、紅色陶胎の三角支釘と三叉支焼具［註87］などが出土している［第26―2図］。また京畿地域ではないが、鄴城から北へ一〇〇キロ前後離れたところにはやはり北朝時代後半から焼造を開始した邢窯が所在する。そして鄴城から西方へ向かうと山東省淄博窯をはじめ複数の窯址で北朝時代からの鉛釉陶器や青瓷を焼造していた可能性が高く、またそこで用いられてい

	北周	北斉	
	西安	首都：鄴城（臨漳）	副都：晋陽（太原）
鉛釉陶	少ない	＊（北魏後期に出現）淡黄色釉や白釉が発達 →豊富な装飾（西アジアの金属器の影響） ＊二彩、三彩の出現（7世紀の唐三彩出現の技術的基礎） ＊白色胎土の上への施釉が主流／北魏とは技法が異なる （⇔北魏後期は赤褐色胎土の上に白化粧をかけて白色素地を作る）	
		河北・河南 范粋墓（575） 李雲墓（576） 大型器種少 四耳壺が主 装飾は刻花文主 黄釉褐彩 ⟷ 妻叡墓1点のみ ・黄釉緑彩陶器 （黄釉の上に褐釉や緑釉を線状に施す） 胎土：粒子の緻密な白色土	山西（太原地域） （水盂：白釉上に黄釉と褐釉を線状に施釉） 胎土：粒子の粗い白色

第２表　東魏・北斉時代の青瓷・鉛釉陶器の様相



第 26－1 図　窯址実測図

第 26－2 図　窯道具

第 26 図　曹村窯 Y1 実測図および窯道具（李江 2010 より転載）

る窯道具は鄴城や邢窯と同様である［第27図］。窯址が発見されていないので詳細は不明であるが、大枠では共通した陶瓷器の様式圏である晋陽地域も同様の窯構造や窯道具であったと想定される［註88］。つまり築窯技術、焼成技術に関する情報が広く共有されていたわけである。陶瓷器の組成で見ると差違はあるが、鄴城の所在する京畿地域と邢窯が所在する定州地域は非常に近く、また製品の胎を見ると非常に精緻で白色を呈する共通性をもつ。おそらくこれらの地域では陶瓷器に使用する粘土の特徴が共通していること、また素地土作りにおける情報の共有などもあった可能性が高い。それは京畿地域では、それまでの北魏時代の都・洛陽における窯業技術の伝統に加えて、北斉時代には二彩、三彩といった、その他の地域に先んじて新しい装飾表現を追求し、作りだしているからである。より精緻な白い素地作りは鄴城に近接する邢窯ではより進んでいた可能性が高く、そういった技術を導入することで、二彩や三彩を作ることを可能にしたものと思われる。晋陽地域では伝統的な技術と装飾技法を駆使することで、地域性豊かな様式を形成した一方で、都・鄴城ではより新しい陶瓷器作りが進められており、晋陽地域などに比べて陶瓷器作りにおける技術・技法の改良が進められていたことになる。こういった意味では北斉時代の都の鄴城周辺での窯業技術の先進性が見て取れる。またそういった技術改良が青瓷の質のさらなる向上と白瓷の出現を生み出したのであり、北朝時代の特に北斉時代は隋・唐時代の陶磁器の様式の初源的な段階であると評価できる。

まとめ

本稿では出光美術館が所蔵し、これまで北朝時代に位置づけられてきた作品の年代や特徴について再整理を行った。また先行研究をふまえ、北朝時代後期における鄴城周辺の陶瓷器の生産と流通の状況を通して、北朝陶瓷の中国陶瓷史上における位置づけに関して改めて検討を行った。

第 27 図　南北朝時代の窯道具の分布（丹羽 2013 より転載）

その結果、館蔵品のいくつかについては、より詳細な年代観を提示するにいたった。また東魏・北斉時代には陶瓷器の組成に地域性が存在することを整理した。それは器種の違いだけでなく、装飾技法の違いや、京畿や晋陽地域と比べて青斉地域の製品は粗雑であることなどから、それぞれの地域で生産が行われ、流通していた可能性が想定される。また地域性が顕著になった二彩・三彩、褐色緑彩が出現する鄴城周辺ではより技術の改良が進み、北朝時代の特に北斉時代は隋・唐時代の陶磁器の様式の初源的な段階であると評価した。

しかし、今回地域性を検討するにあたって集成し、検討を行った陶瓷器資料は未見のものが多く、中国現地での調査を今後改めて行う中で、修正も必要になってくるものと思うが、今後の課題としたい。

［謝辞］

本稿は二〇一五年一二月に成城大学で開催された日本中国考古学会大会のシンポジウム「鄴城考古」にて口頭発表した内容をまとめたものである。拙稿をまとめるにあたり以下の方々から、ご指導・ご教示あるいは資料調査・集成にあたりお世話になった。末筆ながら記して感謝申しあげます。

後藤修、黄信、菊地大樹、小林仁、森達也、丹羽崇史、小沢正人、銭国祥、佐藤サアラ、蘇哲、徐波、八木春生、朱岩石（アルファベット順・敬称略）

［補記］

脱稿後、劉未氏の「北朝墓葬出土瓷器的編年」（『慶祝魏存成先生七十歳

論文集』科学出版社、二〇一五）、二二四～二二五三頁を知った。紀年墓出土資料を通しての北朝時期の瓷器の編年研究であり、時代観に関しては本論の結論とほぼ同じである。しかし、劉未氏は華北地方で出土する北朝時代の多くは湖南岳州窯産と考えている。産地の問題に関してはやはり華北地域での窯址の調査例が増加しさらに検討を加えていく必要があろう。

註1―北方地域に関しては、原田淑人氏の北魏時代の陶器に関する論考があるが、それほど北方地域の研究は進んでいたわけでない。原田淑人「支那南北朝の陶器に就いて」（『考古学雑誌』第二一巻第一号、一九三一）、一～一一頁。

註2―黎瑤渤「遼寧北票県西官営子北燕馮素弗墓」（『文物』一九六五年第三期）、二～二八頁。遼寧省博物館編『北燕馮素弗墓』（文物出版社、二〇一五）。

註3―長谷部楽爾「魏晋南北朝の陶磁」（『世界陶磁全集　中国古代』第十集、小学館、一九八二）、二三三―二四二頁。

註4―矢部良明「北朝陶磁の研究」（『東京国立博物館紀要』第十六号、一九八〇）、三一～一四四頁。

註5―中国硅酸塩学会編、佐藤雅彦・長谷部楽爾・弓場紀知監修『中国陶磁通史』（平凡社、一九九一）。原著は『中国陶瓷史』文物出版社、一九八二）。

註6―諸明良氏は鉛釉陶器の産地に関して、南方地域の六朝墓で出土する鉛釉陶器の独特の型式が存在することに着目し、北方地域のみならず南方地域でも鉛釉陶器を焼造した窯があった可能性を指摘している。諸明良「第三章　魏晋南北朝鉛釉陶器諸問題」（『中国古代鉛釉陶的世界　従戦国到唐代』石頭出版、二〇一四）、五四～八四頁。

註7―諸明良二〇一四、前掲註6、六七頁。

註8―北魏の孝文帝以前の様相が近年明らかになる中で、北魏時代前期の太和八年（四八四）の大同司馬金龍墓以降に鉛釉陶器が再流行する兆しが見られるというのが一般的な見解であったが、より時代的にさかのぼることが指摘されていることは注目される。諸明良二〇一四、前掲註6、六九頁。

註9―矢部良明一九八〇、前掲註4、五五頁。

註10―弓場氏は、北朝時代の紀年墓から出土する鉛釉陶器に関して、六世紀前半と後半では大きく異なることを指摘する。それによると前者はほとんどが褐釉・褐緑釉であり、装飾も非常に少ないが、後者は装飾性が増し、また鉛釉陶器ばかりでなく、青磁・白磁・黒釉陶など種類も多様化している。弓場紀知「北朝～初唐の陶磁―六世紀後半～七世紀の中国陶磁の一傾向―」（『出光美術館研究紀要』第二号、一九九六）、一一三～一三三頁。

註11―青磁は南方産のものが、洛陽あるいは山西などの華北地域に入ってきたことが研究史上前提となってきた。近年ではすべてを南方産とする根拠が十分ではないとの指摘もされている（小林仁二〇〇九、二〇一五）。小林仁「白瓷的誕生―北朝瓷器生産的諸問題與安陽隋張盛墓出土白瓷俑」（『中国古陶瓷研究』第十五輯、二〇〇九）、六一～七八頁。小林仁「白瓷の誕生―北朝の瓷器生産の諸問題と安俑隋張盛墓出土白磁俑―」（『中国南北朝隋唐陶俑の研究』思文閣、二〇一五）、二五四～二七一頁。

註12―山西省大同市博物館・山西省文物工作委員会「山西大同石家寨北魏司馬金龍墓」（『文物』一九七二年第三期）、二〇～三三頁。

註13―淄博市博物館・臨淄区文管所「臨淄北朝崔氏墓地第二次清理簡報」（『考古』一九八五年第三期）、二一六～二二一頁。

註14―張季「河北景県封氏墓群調査記」（『考古通訊』一九五七年第三期）、二八～三七頁。

註15―代尊徳「太原北魏辛祥墓」（『考古学集刊』第一集、一九八一）、一九七～二〇二頁。

註16―中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏城隊・洛陽古墓博物館「北魏宣武帝景陵発掘報告」（『考古』一九九四年第九期）、八〇一～八一四頁。

註17―諸明良一九九四、「魏晋十六国北朝墓出土陶瓷試探」（『台湾大学美術史研究集刊』一九九四年第一期）、一～三八頁。後に『六朝陶瓷論集』（台湾大学出版中心、二〇〇六）に所収。諸明良二〇一三、前掲註6、七三頁。

註18―大同市考古研究所『大同雁北師医北魏墓群』（文物出版社、二〇〇八）。

註19―偃師商城博物館「河南偃師両座北魏墓発掘簡報」（『考古』一九九三年第五期）、四一四～四二五頁。

註20―小林仁二〇〇九、前掲註11。亀井明徳「Ⅰ　南北朝青瓷の展開と白釉陶瓷の創造」（『中国陶磁の研究』六一書房、二〇一四）、五～一一七頁。

註21―長谷部楽爾「北斉の白釉陶」（『陶説』第六六〇号、二〇〇八）、十三頁。

註22―河南省文物考古研究所　等編『鞏義白河窯考古新発現』（大象出版社、二〇一三）。奈良文化財研究所『鞏義白河窯の考古新発見』（奈良文化財研究所研究

報告　第八冊、二〇一二）。奈良文化財研究所『河南省鞏義市白河窯跡の発掘調査概報』（奈良文化財研究所研究報告　第十一冊、二〇一三）。

註23―またそれらを焼造していたのは河南安陽の相州窯が産地であるという理解がされてきた。近年、河北省に所在する邢窯の調査が進む中で、隋代にはきわめて器壁が薄く、光を通すような透光白瓷が出土しているとのことである。邢窯の発掘・整理作業を担当されている河北省文物考古研究所の黄信氏のご教示による。

註24―河南省博物館「河南安陽北斉范粋墓発掘簡報」（『文物』一九七二年第一期）、四七～五七頁、安陽県文教衛生管理站「河南安陽県発現一座北斉墓」（『考古』一九七二年第一期）、四五～四七頁。

註25―楊愛玲「関于安陽隋張盛墓和北斉范粋墓出土白瓷産地問題的研究」（『中国古代白瓷国際学術研討会論文集』上海書画出版社、二〇〇五）、六五～七四頁

註26―中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏城隊「北魏洛陽城内出土的瓷器与釉陶器」（『考古』一九九一年十二期）、一〇九〇～一〇九五頁。橿原考古学研究所附属博物館編『遣唐使がみた中国文化』（橿原考古学研究所附属博物館、一九九五）。

註27―小林仁二〇〇九、二〇一五、前掲註11。森達也「白釉陶与白瓷的出現年代」（『中国古陶瓷研究』第十五輯、二〇〇九）、七九～九五頁。

註28―森達也二〇〇九、前掲註27。森達也「北朝後期陶瓷編年の再検討―北魏洛陽城大市遺跡と鞏義白河窯出土陶瓷の年代をめぐって―」（『中国考古学』第十一号、二〇一一）、一七一～一八五頁。

註29―中国社会科学院考古研究所安陽発掘隊「安陽隋張盛墓発掘記」（『考古』一九五九年第十期）、五四一～五四五頁。

註30―磁県文化館「河北磁県東魏茹茹公主墓発掘簡報」（『文物』一九八四年第四期）、一～九頁。

註31―王建保「磁州窯窯址考察与初歩研究」（『中国古陶瓷研究』第一六輯、二〇一〇）、七～十六頁。李江「河北省臨漳村窯址初探与試掘簡報」（『中国古陶瓷研究』第一六輯、二〇一〇）、四三～五二頁。李国霞・趙学峰・李江・張麗萍・李融武・楊大偉・劉建立「新発現曹村窯三種釉陶瓷的初歩分析」（『中国古陶瓷研究』第一六輯、二〇一〇）、五二五～五三二頁。

註32―森達也二〇〇九、前掲註27。森達也二〇一一、前掲註28。

註33―員安志『中国北周文物珍貴文物』（陝西人民美術出版社、一九九二）。

註34―員安志一九九二、前掲註三三。

註35―楊春棠編『河南出土瓷器』（香港大学美術博物館、一九九七）。

註36―王建保・張志忠・李融武・李国霞「河北臨漳県曹村窯址考察報告」（『華夏考古』二〇一四年第一期）、二四～二九頁。

註37―森達也二〇一一、前掲註28。

註38―また邢窯で現在までに窯址が二六ヵ所発見されているが、北朝時代の窯址は邢台県西堅固のみで、隋時代の窯址は邢台市順徳路、内丘県馮唐と白家庄窯址がある。韓立森・黄信「河北白瓷窯址研究の最前線：邢窯と井陘窯の発見と研究」（『陶説』七三三号、二〇一四）、二八～四二頁。

註39―馮先銘「河北磁県賈壁村隋青瓷窯址初探」（『考古』一九五九年第十期）、五四六～五四八頁。

註40―楊愛玲二〇〇五、前掲註25。

註41―王建保二〇一〇、前掲註31。王建保等二〇一四、前掲註36。

註42―李知宴「三国、両晋、南北朝制瓷業的成就」（『文物』一九七九年第十一期）、四九～五四頁。また隋代張盛墓の白瓷俑の産地についても安陽相州窯、河北邢窯等の異なる見解がある。

註43―山東淄博陶瓷史編写組・山東省博物館「山東淄博寨里北朝青瓷窯址調査紀要」（『中国古代窯址調査発掘報告集』（文物出版社、一九八四）、三五二～三五九頁。

註44―熊海堂『東亜窯業技術発展与交流史研究』（南京大学出版社、一九九五）。丹羽崇史「窯道具からみた唐三彩窯成立・展開過程―三国・晋・南北朝・隋唐期における窯道具の基礎的検討―」（『河南省鞏義市白河窯跡の発掘調査概報』奈良文化財研究所報告第十一冊　奈良文化財研究所、二〇一三）、八九～一〇六頁。徳留大輔「中国新石器時代から西周時代における窯構造の変遷と地域性」（『考古学は科学か　田中良之先生追悼論文集　下』中国書店、二〇一六）、一〇七七～一〇九六頁。

註45―長谷部楽爾一九八二、前掲書3。

註46―これは調査事例が少なく、南方地域とは異なり瓷器の焼造が相対的に遅かったこともあり、後漢王朝の滅亡以降、北朝時代後期における北方瓷器の出現まで陶瓷器が低迷していたと考えられてきた。矢部良明一九八〇、前掲書4。

註47―矢部良明一九八〇、前掲書4。

註48―長谷部楽爾「隋の陶磁」（『世界陶磁全集　隋・唐』第十一集、小学館、一九八二）、一九二～二〇三頁。

註49―中国硅酸塩学会編一九九一、前掲書5。

註50―中国陶磁史を俯瞰する概説関係でも、より注目して言及されることが増えて

いる。例えば次のような文献がある。陳文平『中国古陶瓷』（上海書店出版社、二〇〇三）、三五頁。葉喆民『中国陶瓷史』（生活・読書・新知三聯書店、二〇一一）。

註51―長谷部楽爾一九八二、前掲書3、二四二頁。

註52―その結果、河南安陽の范粋墓（武平六年〈五七五〉）から出土する白瓷壺や白瓷碗は、低火度釉の白釉陶器の意匠と高火度灰釉の青瓷の技術とを一つにあわせた画期的な達成であると評価している。范粋墓出土の白瓷については、鉛釉陶の可能性が指摘されていることは先述したが、しかし、白瓷へ向けて技術改良が相当進んでいる段階である。

註53―なお出光美術館所蔵の北朝時代から初唐の陶磁作品については、弓場紀知氏（一九九六）がすでにその詳細を検討しているが、いくつかの作品については、近年中国における出土事例などの増加に伴い新しい情報が増えていることからも、それらの情報を加える形で再検討しておきたい。ただし、弓場氏の論文の中でとりあげている緑釉龍文壺（弓場論文図1）と緑釉長頸壺（弓場論文の図3）に関しては、年代を比較するための資料が、弓場氏が論文を執筆した段階と比べても大きな資料的な変化がないため、本論ではこの二点についてはとりあげない。ただし注目しておきたいのは、緑釉長頸瓶と類似する形態の青釉長頸瓶が河北贊皇県李翼夫婦墓（建義元年〈五二八〉）、李希宗夫妻合葬墓（武平七年〈五七六〉）や河北磁県東魏趙胡仁墓（武定五年〈五四七〉）からは醤褐釉細頸瓶（M1：114）が出土している。弓場紀知一九九六、前掲註10。中国社会科学院考古研究所河北工作隊「河北贊皇県李翼夫婦墓」（『考古』二〇一五年第十二期、二〇一五年）、六四～七七頁。張季「河北景県封氏墓群調査記」（『考古通訊』一九五七年第三期、一九五七年）、二八～三七頁。

註54―亀井明徳「I南北朝青瓷の展開と白釉陶瓷の創造」（『中国陶磁の研究』六一書房、二〇一四年）。五～一一七頁。

註55―「耳」に関しては中国では一般的に「系」と称される。また亀井氏も「系」を用いるが、本論では耳として表現する。

註56―器高三〇センチ前後の事例は太原市辛祥夫妻墓（五二二）、偃師染華墓（五二六）の近接地点から出土した天鶏壺がある。またより大型のものは、北魏宣武帝景陵墓（五一五）、西安書乾墓（五三四）からの出土例がある。

註57―亀井二〇一四、前掲註54。

註58―亀井二〇一四、前掲註54。

註59―蔚県博物館「河北蔚県九宮口唐墓」（『考古』一九九三年第八期、一九九三年）、七〇九～七一一頁。また本作品に関連する出土例や時代観については、森達也氏より多くの御教示をいただいた。記して感謝申し上げます。

註60―亀井明徳「II隋唐白釉陶瓷の推移と三彩陶の形式」（『中国陶磁の研究』六一書房、二〇一四年）。一一八～三五四頁。

註61―蘇哲「東魏北斉壁画墓の等級差別と地域性」（『博古研究』第四号、一九九二）、一～二五頁。楊效俊「東魏、北斉墓葬的考古学研究」（『考古与文物』二〇〇〇年第六期）、六八～八八頁。小林仁「北斉時代の俑に見る二大様式の成立とその意義―鄴と晋陽―」（『佛教藝術』二九七号、二〇〇八）、四三～七〇頁。（小林仁『中国南北朝隋唐陶俑の研究』思文閣出版、二〇一五再録）。佐藤サアラ「北斉における地域性と白いやきもの―「出土資料集」編集後記にかえて―」『常盤山文庫中国陶磁研究会会報3　北斉の陶磁』（財団法人常盤山文庫、二〇一〇）、六〇～六三頁。森達也二〇一一、前掲註28。

註62―大同市考古研究所「山西大沙嶺北魏墓群発掘簡報」（『文物』二〇〇六年第一〇期）、四～二四頁

註63―大同市考古研究所「山西大同陽高北魏尉遅定州墓発掘簡報」（『文物』二〇一一年第十二期）、四～五一頁

註64―諸明良二〇一四、前掲註6、六六頁。

註65―諸明良二〇一四、前掲註6、六七頁。

註66―矢部氏は同時期の大同永固陵出土の白釉陶は、ほぼ同時期の司馬金龍墓や北京市西郊無名氏墓の鉛釉陶器の出土事例から、華北の鉛釉系白釉陶と推測している。一方で、諸明良氏は、この白瓷双耳罐に関しては、永固陵の報告に写真の掲載もなくまた度重なる盗掘を受けていることから、後世の白瓷が混入した可能性も指摘されている。矢部一九八〇、前掲註4。諸明良二〇一四、前掲註6。

註67―磁県文化館「河北磁県東陳村東魏墓」（『考古』一九七七年第六期、三九一～四〇〇頁）。

註68―代尊徳一九八一、前掲註15。

註69―大同市考古研究所「山西大同沙嶺新村北魏墓地発掘簡報」（『文物』二〇一四年第四期）、四～一五頁

註70―孟昭林「記后魏邢偉墓出土物及邢蜜墓的発現」（『考古』一九五九年第四期）、二〇九～二一〇頁。

註71―中国社会科学院考古研究所河北工作隊「河北贊皇県李翼夫婦墓」（『考古』二

〇一五年第十二期）、六四～七七頁。

註72―淄博市博物館・臨淄区文管所「臨淄北朝崔氏墓地第二次清理簡報」（『考古』一九八五年第三期）、二一六～二二一頁。

註73―山東省文物考古研究所「淄博北朝崔氏墓」（『考古学報』一九八四年第二期）、二二一～二四三頁。

註74―西安市文物保護考古所「西安南郊北魏北周墓発掘簡報」（『文物』二〇〇九年第五期）、二一～四九頁。

註75―西安市文物保護考古所二〇〇九、前掲註74。

註76―陶灯が出土する事例としては洛陽地域が多いようである。ただし、山西大同沙嶺新北魏墓地M25（大同市考古研究所二〇一四）などにも出土している事例があり、地域性を示すような器物であるか否かに関しては現状では不明である。大同市考古研究所「山西大同沙嶺新村北魏墓地発掘簡報」（『文物』二〇一四年第四期）、四～一五頁。

註77―楊效俊二〇〇〇、前掲註61。

註78―小林仁二〇〇八、前掲註61。

註79―森達也「南北朝時代の華北における陶磁の革新」（『中国☆美の十字路展』大広、二〇〇五）、二五九～二六三頁。森達也二〇一一、前掲註28。

註80―佐藤サアラ二〇一〇、前掲註61。

註81―北魏時代末から東魏時代にかけての墓地が洛陽市宜陽県で確認されている。この楊機夫妻合葬墓から青瓷碗九点と青瓷碟二点が確認されている。東魏時代から北斉時代にかけて、洛陽地域周辺で副葬品をもつ墓地の報告事例はほとんど見られず、地域としての詳細が不明なため、拙稿では本記述程度にとどめておく。洛陽博物館「洛陽北魏楊機墓出土文物」（『文物』二〇〇七年第十一期）、五六～六九頁

註82―青瓷ではなくて鉛釉である可能性がある。実見していないため、判断は保留しておく。

註83―このタイプの作例の形式差および時期差については亀井氏の研究が詳しい。また産地の問題に関して発掘報告者は、在地の山東淄博寨里窯産の可能性を指摘している。亀井二〇一三、前掲註54。

註84―小林仁二〇〇八、前掲註61。

註85―李江二〇一〇、前掲註31。王建保等二〇一四、前掲註36。

註86―Y2からは黒陶瓦、青釉陶など、Y3からは青釉陶、陶片、青磚など、Y4からは青釉陶、青釉磚など、Y5からは陶片、瓦片、Y6：陶片、磚などが出土している。

註87―この窯道具は瓷器を焼造する高温焼成には耐えられない可能性が高いと指摘する（李建忠二〇一四）、二八頁。

註88―華北地域における当該時期の窯道具の共通性についてはすでに熊海堂氏や丹羽氏が指摘するところである。また少なくとも新石器時代から漢時代までは、山西、河北、河南、山東地域の窯構造は共通している。そして戦国時代にはこれらの地域では饅頭窯の祖型となる半倒焔式の窯構造となっている（徳留二〇一六）。また宋代以降にも関してもこれらの地域では饅頭窯が使用されていることから、資料は発見されていないが、魏晋南北朝においても共通した窯構造であったことが推測される。熊海堂一九九五、前掲註44。丹羽崇文二〇一三、前掲註44。徳留大輔二〇一六、前掲註44。

［図版出典］

第3図　大阪市立東洋陶磁美術館監修『東洋陶磁の美　大阪市立東洋陶磁美術館コレクション』（美術出版社、二〇一四）より転載

第6－2・3・10図　亀井明徳『中国陶磁の研究』（六一書房、二〇一四）より転載

第10図　ヴィクトリア&アルバートミュージアム　http://collections.vam.ac.uk/item/O459063/vase-unknown/ より転載

第11図　フリア美術館 http://www.asia.si.edu/collections/edan/object.php?q=fsg_F1930.32 より転載

第12図　常盤山文庫中国陶磁研究会編『常盤山文庫中国陶磁研究会会報3　北斉の陶磁』（財団法人常盤山文庫、二〇一〇）より転載

右記以外は、各図中の（　）に記載した各報告書・図録から転載した。

青瓷壺・瓶類	青瓷（その他）	白釉（瓷）壺・瓶類	白釉(瓷)碗類	鉛釉壺・瓶類	鉛釉灯類	鉛釉碗類	鉛釉類（その他）	三彩類	陶壺・瓶類	陶灯	碗皿類
				黄釉瓶1、黄緑釉壺1					大罐1、罐17、壺21		
				黄褐釉壺5					罐5、壺6		
				醤褐釉壺1					罐3		
				醤褐釉壺1					罐8、壺1		
				黄褐釉壺1、醤褐釉罐1、醤褐釉壺1							
				褐色釉三耳罐2							
				（青）釉罐1							
				黄釉罐1							
				青黒釉盤口罐1							
				青黒釉盤口罐1							
									罐1		
青瓷橋耳盤口瓶1、青瓷唾壺1							緑釉器座1、緑釉蓋1		壺1		
									彩絵陶罐2、彩絵陶壺1、罐1、甕1、樽1	灯1	
		白釉双耳壺片1					瓷製小香炉片1		盤口壺（片）11		盤（片）1、碗1
				黄釉盤口罐1							
				黒釉盤口罐1							
				黄釉平縁壺1							
				黄褐釉尊1							
									壺3、罐2		
				醤釉壺1							
				黄褐釉壺1							
									甑1、罐1、壺1、炉1		
							黄釉陶片1				灰陶片
									罐4、壺1		
				黄褐釉壺1					罐3		
									罐2		
									罐2、壺1		
									罐2		
									罐2、壺1		
	青瓷碗1、瓷碗1								罐1		
									罐1、壺1		
				醤釉罐1					罐5、壺3、甕1、釜1	灯1、灯盤1	
青瓷耳付罐1	青瓷碗1								罐1		盤1
	青瓷獅子形水盂1、青瓷杯7								双耳罐1		盤2、碗4

附表　北朝時代の瓷器・陶器を出土する墓地集成表（遼寧、北京、山西、河北、山東、河南、陝西地域）

被葬者あるいは墓名	地域		時代	紀年銘・時期	文献
北燕馮素弗家族墓	遼寧	北票県西官営子	北燕	太平七年（415）	文 1965-3
破多夢墓（沙嶺北魏墓 M7）	山西	大同市水泊寺郷沙嶺村	北魏前半	太延元年（435）	文 2006-10
尉遅定州墓	山西	大同市陽高県王官屯上泉村	北魏前半	太安三年（457）	文 2011-12
無名氏墓（仝家湾 M7）	山西	大同市仝家湾村	北魏前半	※ 461 年前後	文 2015-12
無名氏墓（仝家湾 M9）	山西	大同市仝家湾村	北魏前半	和平二年（461）	文 2015-12
無名氏墓（迎賓道 M16）	山西	大同市斉家坡村	北魏前半	※ 466 ～ 493（洛陽遷都以前）	文 2006-10
無名氏墓（迎賓道 M37）	山西	大同市斉家坡村	北魏前半	※ 466 ～ 493（洛陽遷都以前）	文 2006-10
無名氏墓（迎賓道 M34）	山西	大同市斉家坡村	北魏前半	※ 466 ～ 493（洛陽遷都以前）	文 2006-10
無名氏墓（迎賓道 M62）	山西	大同市斉家坡村	北魏前半	466 ～ 493（洛陽遷都以前）	文 2006-10
無名氏墓（迎賓道 M18）	山西	大同市斉家坡村	北魏前半	※ 466 ～ 493（洛陽遷都以前）	文 2006-10
宋紹祖墓（M5）	山西	大同市水泊寺郷曹夫楼村	北魏前半	太和七年（477）	文 2001-7、雁北
司馬金龍夫婦合葬墓	山西	大同市石家寨村	北魏前半	司馬金龍：太和八年（484）、夫人姬辰：延興四年（474）	文 1972-3
無名氏墓（雁北師院 M2）	山西	大同市水泊寺郷曹夫楼村	北魏前半	※ 484 年頃	雁北
無名氏墓（七里村 M35）	山西	大同市七里村	北魏前半	太和八年（484）	文 2006-10
永固陵（文明皇后馮氏墓）	山西	大同市鎮河公社方山	北魏前半	太和八年（484）陵完成、太和十四年（490）卒	文 1978-7
無名氏墓（七里村 M36）	山西	大同市七里村	北魏前半	※平城中後期～洛陽遷都前後（493）	文 2006-10
無名氏墓（七里村 M33）	山西	大同市七里村	北魏前半	※平城中後期～洛陽遷都前後（493）	文 2006-10
無名氏墓（七里村 M20）	山西	大同市七里村	北魏前半	※平城中後期～洛陽遷都前後（493）	文 2006-10
無名氏墓（七里村 M6）	山西	大同市七里村	北魏前半	※平城中後期～洛陽遷都前後（493）	文 2006-10
無名氏墓（深井 M1）	山西	大同市陽高下深井郷	北魏前半	※平城中後期～洛陽遷都前後（493）	文 2004-10
無名氏墓（電銲器材廠 M114）	山西	大同市紅旗村	北魏前半	※平城（398）～洛陽遷都（493）以前	文 1992-8
無名氏墓（電銲器材廠 M110）	山西	大同市紅旗村	北魏前半	※平城（398）～洛陽遷都（493）以前	文 1992-8
無名氏墓（湖東 M11）	山西	大同市長勝庄	北魏前半	※平城（398）～洛陽遷都（493）以前	文 2014-4
無名氏墓（智家堡石槨墓）	山西	大同市智家堡村	北魏前半	※ 493 年以前	文 2001-7
無名氏墓（雁北師院 M7）	山西	大同市南郊区水泊寺郷	北魏前半		雁北
無名氏墓（雁北師院 M9）	山西	大同市南郊区水泊寺郷	北魏前半		雁北
無名氏墓（雁北師院 M12）	山西	大同市南郊区水泊寺郷	北魏前半		雁北
無名氏墓（雁北師院 M18）	山西	大同市南郊区水泊寺郷	北魏前半		雁北
無名氏墓（雁北師院 M19）	山西	大同市南郊区水泊寺郷	北魏前半		雁北
無名氏墓（雁北師院 M24）	山西	大同市南郊区水泊寺郷	北魏前半		雁北
無名氏墓（雁北師院 M1）	山西	大同市南郊区水泊寺郷	北魏前半		雁北
無名氏墓（雁北師院 M3）	山西	大同市南郊区水泊寺郷	北魏前半		雁北
無名氏墓（雁北師院 M52）	山西	大同市南郊区水泊寺郷	北魏前半		雁北
無名氏墓（済澗北魏墓 M2503）	河南	洛陽市吉利	北魏後半	※ 493 年頃～洛陽遷都前後（524 頃）	文 2015-4
崔猷墓（M15）	山東	淄博市臨淄区大武窩托村	北魏後半	太和十七年（493）	考 1985-3

青瓷壺・瓶類	青瓷 （その他）	白釉（瓷） 壺・瓶類	白釉(瓷) 碗類	鉛釉壺・瓶類	鉛釉灯類	鉛釉碗類	鉛 釉 類 （その他）	三彩類	陶壺・瓶類	陶灯	碗皿類
									短頸罐 1	蓮花座 1	碗 1
	青瓷碗 2										
									罐 2、壺 1		
	青瓷碗 1										
	青瓷碗 1										
									壺 3、把手 壺 4、蓋 1		鉢 1
									小口罐 1、長 頸罐 1、瓶 1		碗 1
青瓷唾壺 1	青瓷碗 1								罐 2		盤 2、 小盤 2、 小碗 13、 小蓋 1
青瓷天鶏壺 2、 龍柄盤口瓶 1、 四耳盤口壺 6、 唾壺 2	青瓷鉢 1					碗 1			罐 1		盆 1、鉢 1、 碗 1、蓋托 1、 小円盒 2、 大円盒 2
	青瓷碗 4								短頸罐 1	灯 1	碗 1、盤 1
									短頸罐 5、 壺 1	灯 1	碗 1、 盤 1、 盒 1
青瓷天鶏壺 1	青瓷杯 3、 青瓷托 1										
	青瓷碗 1										
									罐 1、 瓶 2、 唾壺 1	灯 2	盆 1、碗 1、 蓮華文盤 1、 薫炉 11
									長頸瓶 2		盒 7、碗 7、 杯 7、鉢 2、 盆 1
											盒 1、碗 10
									瓶 1	灯 1	碟 1
				醤釉罐 2					罐 1、壺 2		
											盤 2、盆 1
											碗 2
	青瓷片										陶片 1
青瓷燭台 1	青瓷碗 2								罐 3、碗 2	灯 2	盒 4
	青瓷碗 1		白瓷碗 2						壺 3	灯 4	碗 1、盆 1、 子母盆 1、 托盆 1
青瓷天鶏壺 1	青瓷蓮弁文 碗 4、 青瓷杯 3、 青瓷盤 5										
										灯 2	盒 2、盤 1、 碗 4
青瓷唾壺 2	青瓷碗 3、 青瓷碟 1			紅褐釉盤口壺 1			黄釉硯 1		罐 1、盤口 壺 1、瓶 1、 唾壺 1		碗 7、盤 1、 盒 2

被葬者あるいは墓名	地域		時代	紀年銘・時期	文献
無名氏墓（89YNLTM4）	河南	偃師市南蔡庄連体磚廠	北魏後半	※洛陽遷都（493）後	文 1991-9
無名氏墓（呉橋北魏 WLM1）	河北	滄州呉橋県羅屯	北魏後半	※洛陽遷都（493）後	文 1984-9
渤海氏墓（WLM3）	河北	滄州呉橋県羅屯	北魏後半	※洛陽遷都（493）後	春 2005-3
無名氏墓（11DHAM13）	山西	大同市恒安街	北魏後半	※洛陽遷都（493）後（太和以降）	文 2015-1
無名氏墓（沙嶺新農村 M23）	山西	大同市沙嶺新農村	北魏後半	※洛陽遷都（493）後	文 2014-4
李詵墓	山西	曲沃県侯馬鎮東郊秦村	北魏後半	太和二十三年（499）	文 1959-5
無名氏墓（朱倉M 60）	河南	洛陽孟津県平楽県朱倉	北魏後半	※ 500 ～ 530 年頃	文 2012-12
元淑夫婦合葬墓	山西	大同市小南頭郷東王庄村	北魏後半	元淑：正始四年（507）卒、呂氏：正始五年（508）卒、永平元年（508）合葬	文 1989-8
無名氏墓（YDM4031）	河南	偃師市杏園庄	北魏後半	正始五年（504）以降	考 1991-9
司馬悦墓	河南	洛陽市孟県	北魏後半	永平四年（511）	中原 1979-3
邢偉墓	河北	河間県南冬村四大明山	北魏後半	延昌四年（515）	考 1959-4
宣武帝景陵	河南	洛陽市邙山郷塚頭村	北魏後半	延昌四年（515）	考 1994-9
元睿夫婦合葬墓	河南	偃師市杏園庄	北魏後半	延昌三年（514）卒、熙平元年（516）遷葬	考 1991-9
無名氏墓（YD Ⅱ M1101）	河南	偃師市杏園庄	北魏後半	※洛陽遷都後（516 頃）～ 524 頃	考 1991-9
辛祥墓夫婦合葬墓	山西	太原市東太堡	北魏後半	神亀三年（520）	集刊 1
封魔奴墓	河北	景県安陵区前村郷	北魏後半	太和七年（483）卒、正光二年（521）改葬	考通 1957-3、文 1972-2（李知宴論文）
郭定興墓（HM555）	河南	洛陽市紗廠西路	北魏後半	正光三年（522）	文 2002-9
侯掌墓（M22）	河南	洛陽市孟津県陽山号三十里鋪村	北魏後半	正光五年（524）	文 1991-8
高氏墓	河北	保定市曲陽県党城公社嘉峪村	北魏後半	正光四年（523）卒、正光五年（524）葬	考 1972-5
無名氏墓（HM621）	河南	洛陽市衡山路	北魏後半	※洛陽遷都後（524 頃）	文 2009-3
無名氏墓（YD Ⅱ M926）	河南	偃師市杏園庄	北魏後半	※洛陽遷都後（524 頃）	考 1991-9
崔氏墓（M10）	山東	淄博市臨淄区大武公社窩托村	北魏後半	※洛陽遷都後（525 年以前ヵ）	学報 1984-2
元懌墓	河南	洛陽市老城北	北魏後半	神亀二年（519）卒、孝昌元年（525）改葬	文 2002-2
甄凱墓	河北	石家庄市無極県北蘇郷史村	北魏後半	正光六年（525）	文 1959-1
元乂墓	河南	洛陽市郊朝陽公社向陽大隊（前海資村）	北魏後半	孝昌二年（526）	文 1974-12
染華墓（90YCM7）	河南	偃師市杏元村	北魏後半	正光五年（524）卒、孝昌二年（526）葬	考 1993-5
無名氏墓（2005LYDMM1）	河南	洛陽市偃師前杜楼	北魏後半	※洛陽遷都後（522 ～ 526 頃）	文 2006-12
無名氏墓（聯体磚廠 90YNLTM2）	河南	洛陽市偃師新庄	北魏後半	※ 528 年頃	考 1993-5
元邵墓	河南	洛陽市盤龍塚村	北魏後半	武泰元年（528）卒、建義元年（528）葬	考 1973-4
李翼夫婦合葬墓 M4	河北	贊皇県西高村	北魏後半	建義元年（528）	考 2015-12

青瓷壺・瓶類	青瓷（その他）	白釉（瓷）壺・瓶類	白釉(瓷)碗類	鉛釉壺・瓶類	鉛釉灯類	鉛釉碗類	鉛釉類（その他）	三彩類	陶壺・瓶類	陶灯	碗皿類
青瓷蓋 1									壺 3		
青瓷天鶏壺 1	青瓷碗 1									灯 1	
青瓷天鶏壺 1、青瓷唾壺 1									罐 2		盤 1
青瓷罐 1											碗 2、鉢 1
青瓷天鶏壺 1、青瓷盤口長頸壺 1、青瓷罐 1									罐 2		盤 1、碗 1
青瓷天鶏壺 1											
									短頸罐 1		碗 1、蓮華座 1
				青黄釉盤口壺 1					罐 1		
				黄褐釉盤口壺 1、醤釉盤口壺 1							碗 1
	青瓷碗 1										
	青瓷刻花蓮弁文蓋 1								白陶壺 1		
	青瓷高足盤 1	白瓷胎罐片 1									
	青瓷碗 9、青瓷碟 2								壺 1		
				（青）瓷四耳罐 4、罐 1		瓷碗 6			瓶 4		
									白陶奩 1		碗 2、 蓋 1、白陶碗 1
				黄褐釉獣把蓮弁文瓶 1、黄釉罐 1、黒褐釉罐 1		黒（醤）釉碗 7			罐 1		碗 7
	青瓷碗 1			四耳瓷罐 1					白陶罐 1		
									瓶 1		盤 2、碗 2
青瓷八耳罐									罐 4、壺 5		碗 4、盤 4、盆 2
青瓷唾壺 1	青瓷碗 1			黒褐釉三耳小壺 2							
									瓶 1、壺 2、罐 2		
	青瓷碗 6			黄釉長頸瓶 1、褐釉唾壺 2	黄釉灯 2	黄釉盒 2	褐釉龍首三足器架 2、褐釉虎子 1、 黒釉鐎斗 2		壺 2、罐 2		
青瓷四耳罐 1	青瓷碗 1								奩 1、盤口壺 1、長頸瓶 1、杯 2		
青瓷六耳壺 1、青瓷四耳罐 1	青瓷碗 4										
青瓷蓮弁文六耳壺 1、青瓷盤口四耳壺 1	青瓷碗 1										
									龍耳白陶瓶 1、双耳罐 1		碗 2
	青瓷碗 5								尊 1		盒 1、盆 1

被葬者あるいは墓名	地域		時代	紀年銘・時期	文献
韋鮮玉墓（08M2）	陝西	西安市韋曲杜陵西路	北魏後半	永安二年（529）	与 2015-5
無名氏墓（M926）	河南	洛陽市澗西区紅山郷張嶺村	北魏後半		文 2016-7
韋輝和墓（M4）	陝西	西安市長安区韋曲鎮塔坡村	北魏後半	永熙二年（533）	文 2009-5
無名氏墓（M3）	陝西	西安市長安区韋曲鎮塔坡村	北魏後半	永熙三年（534）	文 2009-5
韋乾墓（M5）	陝西	西安市長安区韋曲鎮塔坡村	北魏後半	永熙三年（534）	文 2009-5
無名氏墓	河南	偃師市南蔡庄	北魏後半		出土河南、No.19
無名氏墓（89YNLTM4）	河南	偃師市南蔡庄	北魏後半		考 1991-9
無名氏墓（M 3）	河南	洛陽市孟津県平楽県朱倉	北魏後半		文 2012-12
無名氏墓（朱倉M 51）	河南	洛陽市孟津県平楽県朱倉	北魏後半		文 2012-12
無名氏墓（朱倉M 11）	河南	洛陽市孟津県平楽県朱倉	北魏後半		文 2012-12
崔氏 6 号墓	山東	淄博市臨淄区大武公社窩托村	北魏後半		学報 1984-2
崔氏 9 号墓	山東	淄博市臨淄区大武公社窩托村	北魏後半		学報 1984-2
楊機夫婦合葬墓	河南（洛陽）	洛陽市宜陽県豊李鎮馬窯村	東魏	楊機：永熙二年（533）卒。夫人梁氏：普泰二年（532）卒。天平二年（536）年合葬	文 2007-11
趙明度墓（M115）	河南（京畿）	安陽県安豊郷洪河村	東魏	天平三年（536）卒、天平四年（537）葬	安陽北朝
崔鴻夫婦合葬墓（M 1）	山東（青・斉）	淄博市臨淄区大武公社窩托村	東魏	崔鴻:孝昌元年（525）卒、孝昌二年（526）葬。夫人：天平三年（536）卒。天平四年（537）合葬	学報 1984-2
高雅夫婦合葬墓	河北（定冀滄幽）	衡水市景県野林庄北屯公社	東魏	熙平三年（518）没、天平四年（537）改葬	文 1979-3
崔混墓（M 3）	山東（青・斉）	淄博市臨淄区大武公社窩托村	東魏	元象元年（538）	学報 1984-2
崔令姿墓	山東（青・斉）	済南市聖佛寺院	東魏	元象元年（538）	参 1966-4
無名氏墓（M1・九原岡）	山西（太原）	忻州市忻州府区蘭村郷下社村	東魏末北斉初	※ 539 年頃	考 2015-7
邢晏墓	河北（定冀滄幽）	河間県南冬村	東魏	興和三年（541）	河北選集
封延之墓	河北（定冀滄幽）	衡水市景県前村郷后屯村	東魏	興和三年（541）	考通 1957-3
房悦墓	山東（青・斉）	高唐県城関公社	東魏	興和三年（542）	叢刊 2
賈思伯夫婦合葬墓	山東（青・斉）	濰坊市寿光市城関鎮李二村	東魏	賈思伯：孝昌元年（525）、夫人劉氏：興和三年（541）卒、武定二年（544）合葬	文 1992-8
無名氏と夫人合葬墓	河北（定冀滄幽）	呉橋県大斉区西宋門郷小馬廠村	東魏	無名氏：武定二年（544）、夫人畢氏：興和三年（541）	考通 1956-6
封柔夫婦合葬墓	河北（定冀滄幽）	呉橋県小馬廠村	東魏	封柔：興和三年（541）、夫人：武定四年（546）	文 1979-2、河北選集
崔氏 7 号墓	山東（青・斉）	淄博市臨淄区大武公社窩托村	東魏	※ 538 ～ 547 年頃	学報 1984-2
高長命墓（M1）	河北（定冀滄幽）	景県野林庄北屯公社	東魏	武定五年（547）	文 1979-3

青瓷壺・瓶類	青瓷（その他）	白釉（瓷）壺・瓶類	白釉(瓷)碗類	鉛釉壺・瓶類	鉛釉灯類	鉛釉碗類	鉛釉類（その他）	三彩類	陶壺・瓶類	陶灯	碗皿類
青瓷長頸壺 1				黒褐釉長頸瓶 1、黒褐釉双耳瓶 1、黒褐釉壺 2、黒褐釉四耳罐 2					罐 1		碗 1
									罐 2、瓶 2		碗 1
青瓷蓮弁文六耳壺 1									罐 1、長頸壺 2	押座 7	盤 5、盆 1、鉢 2、碗 3、杯 1
				（青釉）罐 10					鼎 20、 罐 4、壺 2		盤 1
青瓷天鶏壺 1、青瓷蓮弁四耳罐 1	青瓷豆 1、青瓷碗 1										
青瓷罐 1、青瓷虎壺 1	青瓷宝相華文盤 1、青瓷高足盤 1、青瓷碗 3										
									細頸瓶 1、瓶 1、罐 1、盆 1		
									細頸瓶 1、広肩瓶 1、鶏首壺 1、罐 10	灯盞 1	盤 1、碗 11、盒 1
									罐 3		碗 8
	青瓷碗 1			緑釉四耳壺 1							
				黄釉貼花蓮弁文尊 7		黄釉盒 4、黄釉盤 7、黄釉碗 8、黄釉杯 8			罐 2、甕 1		鉢 2
											碗 1
									単耳罐 1		碗 1
									罐 1		
									罐 2、壺 2		碗 6、盤 1、盒 2
青瓷唾壺 1、青瓷蓮弁文大瓶 2、青瓷蓮弁文大瓶 2	青瓷盤 1			黒褐釉瓶 1		緑釉碗 1、緑釉盒 1、緑釉碗 1					
	青瓷高足盤 4、青瓷碗 4										碗 2、 盤 2、杯 1、 盞 1、豆 1
						浅緑釉碗 5			盤口壺 1、長頸瓶 1		
青瓷蓮弁文天鶏壺 3	青瓷盤 4、青瓷盒 3								長頸瓶 1		碗 3
				鉛釉鶏首壺 1、鉛釉高領瓶 1、鉛釉唾壺 1	鉛釉灯 1	鉛釉盤 1、（鉛釉）碗 1、(鉛釉）盤 1			罐 2		盤 1、盤 1、碗 7、杯 1
青瓷天鶏壺 5				鉛釉貼花瓶 2、鉛釉罐 2	鉛釉灯 4	鉛釉盒 11、鉛釉托杯 2、鉛釉盤 10、鉛釉碗 39		三彩盂 1	甕 1、瓶 1、罐 6、碗 5		
	青瓷碗 5										碗 1

被葬者あるいは墓名	地域		時代	紀年銘・時期	文献
趙胡仁墓（堯趙墓）	河北（京畿）	磁県申庄公社東陳村	東魏	武定五年（547）	考 1977-6
無名氏墓（M51）	河南（京畿）	安陽市固岸墓地Ⅱ区	東魏	武定元年（543）卒、武定五年（547）葬	考 2008-5
茹茹公主墓（CDZM1）	河北（京畿）	磁県大塚営村	東魏	武定八年（550）	文 1984-4
無名氏墓（湾漳北朝墓）	河北（京畿）	邯鄲市磁県湾漳村	東魏	※ 550 年	考 1990-7
崔芬墓	山東（青・斉）	臨朐県冶源鎮	北斉	天保元年（550）卒、天保二年（551）葬	文 2002-4
元良墓	河北（京畿）	邯鄲市磁県講武城孟庄村	北斉	天保四年（553）	考 1997-3
賀抜昌墓	山西（太原）	太原市万柏林区義井村	北斉	天保四年（553）	文 2003-3
侯莫陳墓（TM62）	山西（太原）	太原市晋源区羅城鎮閆化村	北斉	天保六年（555）	文 2004-6
張肅墓	山西（太原）	太原市郊犢坡	北斉	天保十年（559）	張肅墓図録
垣氏墓	河北（京畿）	磁県講武城近傍	北斉	太寧二年（562）	考 1959-1
庫狄廻洛夫婦合葬墓	山西（太原）	晋中市寿陽県貴家荘	北斉	庫狄廻洛：太寧二年（562）卒。夫人尉氏：河清元年（562）合葬	学報 1979-3
趙信墓（M20）合葬墓	山西（太原）	太原市晋源区羅城街道閆化村	北斉	清河三年（564）	文 2015-12
無名氏墓（M14）合葬墓	山西（太原）	太原市晋源区羅城街道閆化村	北斉	※ 564 年頃	文 2015-12
無名氏墓（M52）合葬墓	山西（太原）	太原市晋源区羅城街道閆化村	北斉	※ 564 年頃	文 2015-12
無名氏墓（M64）合葬墓	山西（太原）	太原市晋源区羅城街道閆化村	北斉	※ 564 年頃	文 2015-12
封子絵墓	河北（定冀滄幽）	景県十八乱塚	北斉	河清四年（565）	考通 1957-3
崔徳墓（M 5）	山東（青・斉）	淄博市臨淄区大武公社窩托村	北斉	河清四年（565）卒、天統元年（565）葬	学報 1984-2
張海翼墓	山西（太原）	太原市晋源区呂梁山脈蒙山麓	北斉	天統元年（565）	文 2003-10
韓裔墓	山西（太原）	晋中市祁県白圭鎮	北斉	天統三年（567）	文 1975-4　出土山西、No.11
庫狄業墓	山西（太原）	太原市小店区南坪頭村	北斉	天統三年（567）	文 2003-3
婁叡墓	山西（太原）	太原市南郊王郭村	北斉	武平元年（570）	文 1983-10、婁叡墓
常文貴墓	河北（定冀滄幽）	黄驊市西才元村	北斉	武平二年（571）	文 1984-9

青瓷壺・瓶類	青瓷（その他）	白釉（瓷）壺・瓶類	白釉(瓷)碗類	鉛釉壺・瓶類	鉛釉灯類	鉛釉碗類	鉛釉類（その他）	三彩類	陶壺・瓶類	陶灯	碗皿類
				鉛釉鶏首壺 7、鉛釉盤口壺 1、鉛釉尊 1、鉛釉罐 3	鉛釉灯 4、鉛釉灯盞 2	鉛釉盒 30、鉛釉盤 8、鉛釉碗 110					
											碗 9
青瓷三耳盤口瓶、青瓷罐 1	青瓷高足盤 1										
	青瓷碗 6								壺 2		盤 1
				鉛釉鶏首壺 1					長頸瓶 2、壺 2、罐 1		碗 5
瓷罐 4	高足盤 1 、瓷碗 10、瓷硯 1、瓷唾壺 1						緑釉薫炉 1		罐 4		碗 4
瓷罐 9	瓷高足盤 2、瓷碗 9								罐 3		碗 1
	青瓷片										盤 4、碗 1
	青瓷高足盤 1、青瓷碗 1								罐 1、双耳罐 1		盆 2、 盤 2、盒 2
		白釉緑彩蓮弁文三耳罐 2、白釉緑彩長頸瓶 3、白釉蓮弁文四耳罐 2	白瓷碗 2	黄釉印花胡楽図双耳扁壺 4							盒 2、盤（片）1、碗 1
	瓷碗 1										
									瓶 1		
青瓷六耳壺 2				黄地緑彩蓮弁文六耳壺 1、黄地緑彩蓮弁文四耳壺 1							
青瓷天鶏壺 1、青瓷蓮弁文罐 2、青瓷罐 6	青瓷燭台 3、青瓷碗 4			緑釉扁壺 1					壺 2		加彩盤 8
											盂 1
青瓷耳付罐 2	青瓷碗 16						黒釉片 1		壺 1	灯座 6	碗 9
青瓷天鶏壺 1											
青釉蓮花瓷尊 1	青瓷碗 1、青瓷蓮弁文碗 1			青褐釉小碗 1							蓋 1
青瓷天鶏壺 1											
青瓷四耳刻花蓮弁文罐 1、青瓷刻花蓮弁文六耳罐 1											

被葬者あるいは墓名	地域		時代	紀年銘・時期	文献
徐顯秀墓	山西（太原）	太原市迎沢区郝庄郷王家峰村	北斉	武平二年（571）	文 2003-10
傅隆顯墓	河北（定冀滄幽）	懐柔県韋里村	北斉	武平二年（571）	文 1964-12
堯峻夫婦合葬墓	河北（京畿）	邯鄲市磁県東陳村	北斉	天統二年（566）卒、天統三年（567）合葬。夫人吐谷渾静眉：天統元年（565）卒、天統三年（567）年合葬。夫人独孤思男：武平二年（571）卒	文 1984-4
道貴墓	山東（青・斉）	済南市馬家庄	北斉	天統五年（569）卒、武平二年（571）葬	文 1985-10
無名氏墓	山西（太原）	太原市南郊区金勝村	北斉	※ 571 年頃	文 1990-12
賈進墓（M54）	河南（京畿）	安陽県安豊郷北李庄村	北斉	武平二年（571）卒、武平三年（572）葬	安陽北朝
賈宝墓（M1）	河南（京畿）	安陽県安豊郷洪河村	北斉	武平三年（572）	安陽北朝
劉通墓（M1）	河南（京畿）	安陽市殷墟区皇甫屯村	北斉	武平三年（572）	安陽北朝
崔博墓（M 12）	山東（青・斉）	淄博市臨淄区大武公社窩托村	北斉	武平四年（573）	学報 1984-2
元始宗	河北（京畿）	邯鄲市磁県講武城郷孟庄村	北斉	武平二年（571）卒、武平五年（574）葬	文 1994-11
范粋墓	河南（京畿）	安陽県洪河屯村	北斉	武平六年（575）	文 1972-1、考 1972-1,5、文 1980-7
李華墓（M119）	河南（京畿）	安陽県安豊郷北李庄村	北斉	武平六年（575）卒、武平七年（576）葬	安陽北朝
顔玉光墓	河南（京畿）	安陽県許家溝	北斉	武平七年（576）	考 1973-2
李雲夫婦合葬墓	河南（京畿）	濮陽市濮陽県河砦村	北斉	李雲：武平六年（575）卒、武平七年（576）葬。夫人鄭氏：武定七年卒、武平七年遷葬	考 1964-9、精華
高潤墓（CHM1）	河北（京畿）	邯鄲市磁県東槐樹村	北斉	武平六年卒（575）、武平七年葬（576）	考 1979-3
宇文倹墓	陝西	咸陽国際空港	北周	建徳五年（576）	与 2001-3
李希宗夫婦合葬墓	河北（定冀滄幽）	贊皇県南邢郭村	北斉	李希宗興和二年（540）。夫人雀氏：武平六（575）、武平七年葬（576）	考 1977-6
無名氏墓（M99）	河南（京畿）	安陽県安豊郷木廠屯村	北斉（~隋）		安陽北朝
無名氏墓（2006AGM2）	河南（京畿）	安陽県安豊郷固岸村	北斉（~隋）		華夏 2007-2
無名氏墓	河北（定冀滄幽）	河間県沙窩村	北斉		出土河北、No.15
無名氏墓	山西（朔州）	朔州市朔城区窯子頭多郷水泉梁村	北斉		文 2010-12
無名氏墓（淄博和庄）	山東（青・斉）	淄博市淄川区和庄	北斉	※ 570 年頃	文 1984-12
無名氏墓	山東（兗）	兗州市夏村	北斉		出土山東、No.37
無名氏墓	山東（兗）	兗州市邢村	北斉		出土山東、No.36

青瓷壺・瓶類	青瓷（その他）	白釉（瓷）壺・瓶類	白釉(瓷)碗類	鉛釉壺・瓶類	鉛釉灯類	鉛釉碗類	鉛釉類（その他）	三彩類	陶壺・瓶類	陶灯	碗皿類
	瓷盆							三彩奩片1	罐12		碟1
青瓷四耳盤口瓶1	青瓷碗14								瓶1		碟1
青瓷蓮弁文六耳盤口瓶1	青瓷碟1、青瓷深腹形碗9	白瓷盤口唾壺1		褐釉盤口四耳壺1、黒釉盤口唾壺1							
青瓷唾壺1				褐色盤口四耳壺1					瓶17		鉢4
青瓷罐片1									壺1		碗2、鉢1
青瓷四耳罐1、青瓷蓮弁四耳罐1	青瓷盤1、青瓷碗9			黒釉四耳罐1							
	青瓷小盂1	白瓷瓶1	白瓷盒1、白瓷深腹碗1、白瓷燭台1						罐3		
青瓷四耳罐1				緑釉唾壺1					罐6、瓶3		

被葬者あるいは墓名	地域		時代	紀年銘・時期	文献
韋舒墓（08M5）	陝西	西安市韋曲杜陵西路	北周	天和六年（571）	陝西省考古研究院 2015
叱羅協墓	陝西	咸陽北斗郷新里村	北周	建徳三年（574）	北周珍貴
王徳衡墓	陝西	咸陽国際空港	北周	建徳五年（576）	北周珍貴
独孤藏夫婦合葬墓	陝西	咸陽国際空港	北周	宣政元年（578）	北周珍貴、精華
若干雲墓	陝西	咸陽国際空港	北周	宣政元年（578）	北周珍貴
安伽墓	陝西	西安市未央区大明宮郷炕底塞村西北	北周	大象元年（579）	文 2001-1、与 2000-6
無名氏墓（M3）	陝西	西安市韋曲鎮塔坡村	北周		文 2009-5
崔昂夫婦合葬墓	河北（定冀滄幽）	平山県上三汲村	北斉～隋	崔昂：天統二年（566）。夫人仲華：開皇八年（588）	文 1973-11 河北考古 1949-2009
尉遅雲夫婦合葬墓	陝西	咸陽国際空港	隋	尉遅運：大成元年（589）卒。賀抜氏：隋開皇九年（589）卒。仁寿元年（601）合葬	北周珍貴
王士良夫婦合葬墓	陝西	咸陽国際空港	隋		北周珍貴

註①：文献に関しては次のように略している。
文＝文物、参＝文物参考資料、考＝考古、考通＝考古通訊、学報＝考古学報、華夏＝華夏考古、集刊＝考古学集刊、春＝文物春秋、季＝文物季刊、与＝考古与文物、叢刊＝文物資料叢刊、中原＝中原文物、張肅墓図録＝太原郊壙坡北斉張肅墓文物図録 1958、河北選集＝河北省出土文物選集（文物出版社、1980）、精華＝中国文物精華（文物出版社、1992）、北周珍貴＝中国北周文物珍貴文物（陝西人民美術出版社、1992）、婁叡墓＝北斉東安王婁叡墓（文物出版社、2006）、雁北＝大同雁北師院北魏墓群（文物出版社、2008）、出土河南＝中国出土瓷器全集・第 12 巻河南編（科学出版社、2008）、出土山東＝中国出土瓷器全集・第 6 巻山東編（科学出版社、2008）、出土河北＝中国出土瓷器全集・第 3 巻河北編（科学出版社、2008）、安陽北朝＝安陽北朝墓葬（科学出版社、2013）

註②：地域の項目に関して東魏・北斉時期に関しては京畿（河北・河南の一部）、洛陽、太原、朔州、定冀滄幽、青（州）・斉（州）と兗（州）と地域細分の表記を行っている。

註③：紀年名・時期の項目では墓誌資料を中心に判明している年号を記載した。基本的に被葬者の没年と埋葬年が異なる場合は、両者を分けて記載している。また※印は出土器物をもとに推測されるおおよその年代観を示している。

註④：各器物の名称・分類は基本的に各報告に基づくが、一部変更しているものもある。また器物の後に記す数字は件数である。

Various Aspects of Ceramics of the Northern Dynasties Period in China

TOKUDOME, Daisuke

In dealing with the ceramic history of the Northern Dynasties period, there are many new discoveries and reports from the old city site of Yecheng as well as from Hebei, Shanxi and Shandong provinces. They show clear differences in many aspects related to ceramic production between the early Northern Dynasties period (or Northern Wei) and the late Northern Dynasties period (Eastern Wei and Northern Qi). Also, during the Northern Qi period, there exist local differences in ceramic production and consumption. All these new data will add new information on the further studies on dating extant ceramic works.

In this article, the author re-examined the works in the Idemitsu Museum's collection, which had been dated to the Northern Dynasties period, and made studies of them. The obtained data about the ceramic production and circulation of products in Yecheng and its surrounding area revealed the new information leading to re-location of extant works in the newly established history of Northern Dynasties period ceramics.

The study revealed that more specific dating is now possible to the specimens from the Museum collection based on the new data on their production and circulation in the market. In regard to their production, it became obvious that the drastic technical development took place in the Northern Qi period. There also was a clear difference between those produced in Yecheng and Taiyuan in development history as well as in style (assemblage). Yecheng and Luoyang could technically be grouped together as the same. The advanced prototypes of Northern Qi two-color and three-color glazed ware and Sui dynasty white porcelain (Xin Kiln of Lincheng and Caocun Kiln of Linzhang) appeared in this area. It is clear that the Yecheng area was more advanced technically when compared to Taiyuan and other areas due to a series of new technical experiments in ceramic production which became the foundation for the further development in Sui and Tang period ceramic production.

出光美術館研究紀要　第二十二号

二〇一七年一月三十一日

編集　公益財団法人 出光美術館
発行　東京都千代田区丸の内三―一―一
電話　〇三―三二一三―九四〇一

制作　株式会社 ブリュッケ

印刷　東洋美術印刷株式会社

© Idemitsu Museum of Arts, 2017
Printed in Japan